
Senri **黄昏を連れた少女**

天狼千影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Senri 黄昏を連れた少女

【Nコード】

N0527J

【作者名】

天狼千影

【あらすじ】

様々な謎を抱えた少女、天影泉。自らの名前以外、過去の記憶は一切ありませんでしたが幸福な日常を過ごしていました。そんな幸福な日常は突然頭の中に響く声と共に失われてしまいました。気が付くと辺り一面雪景色！？黒かった髪が白銀色に！？瞳も黒から金色に！？さらに妖精さんが奴隷に！？異世界で戦いや人々の想いに巻き込まれながら泉は帰る旅を続けます。徐々によみがえる記憶。思い出し始めた自らに秘められた“力”。「私は、理想を叶えし者…自己満足でもなんでもいい。絶対に仕方ないで済まさない！」。

最強系異世界トリップ物語。理想で現実を侵食する！

プロローグ「少女の日常」(前書き)

初めて投稿します！ぜひぜひご意見ご感想ください！

プロローグ「少女の日常」

現代の朝。ある所に少女が一人歩いておりました。スカートにブレザーとどこにでもいるような学生姿でした。当たり前です。少女は高校二年生だからです。もとい、なつたばかりです。

ぼくとした感じで学校に向かって歩く少女の名前は天影泉^{あまかげいずみ}。一五九センチくらいの身長。髪は黒の肩より長いくらい。瞳も綺麗な黒です。スタイルは……本人は自覚していませんがなかなかいいです。着痩せするタイプというやつでしょう。そう言えば制服は少しサイズが大きいものを着ています。本人いわく「このほうが楽」だそうです。もったくない。ゲフンゲフン……女性のスタイルで長々語るのはいけませんね。

気を取り直して。

まあ美人ですが、一応平均的と言える少女なのです。

「泉姉^{いずみねえ}」

そう言いながら少年が駆け寄ってきます。少年の名は御坂早戸^{みさかはやと}。

実は天影泉は養子なのです。詳しい事情はわかりませんが、記憶が鮮明でないらしく覚えてるのは名前だけなのだとか。養子にもられた先でいじめられるなんてドラマな展開はなく、とても愛されました。お父さんやお母さんからの「せっかくな子になつたんだから名字変えたら？」という提案だけは泉は断りました。唯一の記憶だから、だそうです。

というわけで御坂早戸くんは義理の弟なのです。家族四人で幸せな家庭です。

弟くんは一つ年下の高校一年生です。この早戸もまあ平均的な少年です。ちなみに、姉を溺愛^{てきあい}しており、いわゆるシスコンちゃんです。普段はうまく隠していますが。

「置いてくよ〜」

「早戸が遅いのが悪いんでしょ〜私のせいじゃないよ〜」

「普通は女の子のほづが準備に時間かかると思っただけど」

「……それって何気に私が女の子っぽくないってこと……?」

ここで普通ならじと目でにらむのでしようが、嬉しいことに泉ちゃんは普通ではないのです。

しょぼーんとしながらちよっぴり瞳をウルウルさせて上目遣いな泉ちゃん。もちろん演技で冗談なのですが、つやつやの白い肌・宝石のような黒い瞳・キラキラと太陽のように輝く黒髪と美人で可愛い泉ちゃんがこの行動をすると破壊力抜群です。もちろんお姉ちゃんが大好きな早戸は顔を赤くさせながらあたふた。早戸がお姉ちゃん大好きっ子になってしまった原因はこんなしぐさだったりするわけです。

「泉姉は十分すぎるくらい女の子っぽいよ……」

「ありがとう」

あたふたな早戸。それに気付かず素直なお礼と共に微笑む泉。早戸、再び撃沈。げきちん

これが天影泉の平凡な日常です。周囲は平凡ではないのですが、現に早戸が撃墜げきついでされていますし。

ちなみに早戸くんはお姉ちゃんから視線をそらし顔をの熱が引くのを待っています。

そして機嫌よさげな泉。嘘だとしても「女の子っぽい」発言は嬉

しいものです。早戸が本気なのに気づいていません。早戸くんは一途に泉ちゃんの気を引こうと頑張っている最中です。もちろん血は繋がっていないので結婚も大丈夫です。なんとか頑張っているのですが、逆に早戸くんが泉ちゃんの虜になるばかりで進展ありません。頑張れ早戸！負けるな早戸！

いつも通り楽しげな泉とドキドキな早戸は学校に向かいます。言い忘れていましたが、もちろん二人は同じ学校です。早戸くんは泉ちゃんと同じ高校にいけるよう頑張りました。健気です。

さて、そろそろ学校に着きました。二人はそれぞれ自分の教室に向かいます。早戸は名残惜しそうです。え？そのネタ引っ張りすぎだつて？いいじゃないですか。ラブコメみたいな感じで。ラブコメじゃないのかって？一応ファンタジーですよ？

早戸をほったらかしにして泉ちゃんを追っかけます。主人公ですから。

泉が教室に入ると真っ先に声をかけてくる女の子が三人。仲の良い友人たちです。

「あたしの愛しの泉ちゃんだ〜」

「あたしの愛しのつて何だ。教室のと真ん中で同性に愛を叫ぶな。私はそんな趣味ないから」

何気にきついつつこみを入れる泉。いつものことなので手慣れた感じだ。……慣れるほどあんな会話があつたのか。

もうすでに自分のものにした感じの愛の発言したのは姫耶麻^{ひめやま}那^い。^い 苺那の百合発言は冗談なのか本気なのか分かりません。これも泉ちゃんの魅力か……。

「おはよ、泉ちゃん。愛されてるね。可愛いから仕方ないか〜」

「そうだな……男子からの人気はもちろん、女子からもなかなか人気があるからな」

ほんわかした雰囲気で「仕方ないか」と言ったのは天知舞弓^{あまちまゆ}。ほわほわした天然っぽい感じだけど、実は頼りになるタイプで泉が一番信用している相手でもあります。

その次の男前な発言は雫月櫻^{なつきなぐひ}。身長が高くてかつこいい美人です。揺れるポニーテールが親しみやすさを醸し出しています。イケメンと言ってもいい感じの美人なのです。

泉は抱きつこうとしてくる苺那を引つpegし自分の席に座る。ちなみに舞弓に「あんまりしつこいと嫌われるよ」と言われて苺那はぬあーツ！と机につつぶしていました。

舞弓と苺那のコントを横目に見ながら、櫻は泉の机に足を組みながら腰掛ける。

「泉はやっぱり朝から大変だな」

「わかってるなら代わってよ」

「私はどうやら近づきがたいタイプらしいからな。自分で何とかするしかない」

「櫻が守ってくれたらいいのに」

にこにこな泉。本人に自覚なしのえへな微笑み。ぼふんと音を立てて頬を染める櫻。

実は泉の友人である三人は全員泉ちゃん大好きなのです。何だこのハーレムっぷりはツ！って感じですね。

と、泉ちゃんの日が始まりました。

第一話「夢幻世界」(前書き)

少しでも読んでくれている方がいるようで嬉しいです！
皆様に愛される物語を書けるよう頑張ります！
では第一話です！

第一話「夢幻世界」

放課後。静かになり始めた校舎。少しずつ沈んでいく太陽。そんな、寂しさを感じさせる高校の屋上。

屋上に見える人影は二つ。二つの人影は、屋上のほぼ中央に向かい合って立っていました。皆さんはもう想像が付きますでしょうか？そうです。告白です。

「どうやら男の子が告白したようです。告白した男の子の名前は伊坂卓也^{さかたくや}。いわゆるイケメンな男の子で、今まで付き合ってきた女の子は数知れず。少年っぽい口調と健気な態度が彼の武器です。」

「あの……僕は、泉さん^{いずみ}のことが……大好きです。付き合ってください！」

そして、告白されたのは泉ちゃんです。泉ちゃんはそこまで目立って美人と言うわけではないのですが、言葉では表現出来ない魅力を持っているのです。そんな人を惹きつける魅力を持つ泉ちゃんに伊坂卓也は目を付けたのでしよう。

え？何で伊坂卓也だけフルネームで呼んでるのかって？それは単に私が気に入らないからですよ。可愛い泉ちゃんを狙いやがって。あ、あはは、冗談ですよ。

まあとにかく泉ちゃんは告白されてしまったのでした。

「私はね、壊れてるの」

泉は唐突に言いました。いつもの柔らかい表情はなく、能面のような無表情で。ただ、淡々と。

対する伊坂卓也は泉の変わり様に固まっていました。

「ねえ、あなたは……私の大切になれる？私の大切な、理想に」

無表情に伊坂卓也を見つめる泉を、告白されたことで不安になっているのだと判断し、自信を滲ませた真剣な瞳で伊坂卓也は見つめ返しました。泉の瞳には、不安どころか冷たく落ち着いた光が灯っていることに気がませんでした。

「……なってみせます。あなたの、一番の大切に。……あなたの、理想に！」

両手を握り締め、伊坂卓也は泉をまっすぐに見ました。

けれど泉に変化はなく、ただ冷たい瞳でじっと見ています。

「うっん、違うの。そうじゃない」

ゆっくりと首を左右に振り、泉は再びじっと前を見据えました。

「私は、私が想う理想を叶えることが出来るなら、ただそれだけでいい。たとえ私の心が崩壊しても、たとえ私の体が朽ち果てても、たとえ……世界が滅びても」

泉の声はあまりにも真剣な響きを持っていて。その異常性によろやく伊坂卓也は恐怖を持ち始めました。

無意識のうちに、伊坂卓也は一步後ろに下がりました。

「ねえ……無理でしょう？あなたは、私の重さを抱えきれない。あなたはきつと、耐えきれない」

泉が一步近づくの、伊坂卓也はまた一步下がりました。

泉はゆっくりうつむくと、ぱつと顔を上げました。その顔には、

今までの能面のような無表情を想像出来ないくらいの笑顔が刻まれていました。

きよんとする伊坂卓也。泉から感じた威圧感や恐怖が一切なくなっていて、今の彼女は間違いなくいつもの魅力的な少女に戻っていました。

「ごめんね。ちょっとからかつちゃって」

いたずらっぽく笑って、泉は微笑みました。少し、悲しげな表情も混ざっていた気がしました。

「さっきのは冗談だから、全部忘れて」

ゆっくりと振り返って、泉は階段に向かって行きます。足取りは軽く、ゆっくりと。

「ごめんなさい。あなたとは付き合えない。きっと、あなたは私のこと嫌いになるよ。私は、壊れてるから」

階段に向かう足を止めて、わずかに振り返ると伊坂卓也に向かって微笑んだ。先ほどの微笑みよりも儂く崩れそうな微笑みでした。

しかし、そんな泉はあまりにも綺麗で。すごく魅力的で。

伊坂卓也はどうして彼女に告白しようと思ったのか、好きになったのか明確に理解しました。告白するまでは今までと同じでした。女の子に惚れさせて、ただ楽しむだけの為。けれど、今回は違うとはっきりわかりました。伊坂卓也の心の奥にくすぶっている熱いものは消え去るところかさらに燃え上がってしまったからでした。

じわりと頬を染め、伊坂卓也はずっと泉が去って行った階段の方を見つめ続けていました。

泉ちゃんは一人帰路に着いていました。いつも泉ちゃんと一緒にいる三人の姿は見えません。今日は皆用事があると早く帰ってしまったのです。さっきまで告白されていたので、一人で帰ることになったのです。

泉ちゃんはわずかに視線をななめ上に向けながら、先ほどの屋上で告白を思い返していました。

泉ちゃんも告白されて嬉しくないわけではないのです。女の子ですから。しかし。

(何人もと付き合ったり別れたりしてる人とは付き合えないよね)

伊坂卓也がかなりモテていることを泉ちゃんは知っていました。けれど、やっぱり告白は嬉しかった泉ちゃんは、少し心中を吐露してしまったのかもしれない。

(どちらにしてもカッコいい人は苦手だから断ってたけどね)

泉ちゃんは一般的にカッコいいと言われている人たちが苦手です。自分のことをごくごく普通だと思っているからなんです。とつても美人で不思議な魅力を自分が持っているのを泉ちゃんは気付いていません。

そんな感じで色々考えながら歩いていると、家に到着しました。がちやり、と玄関の扉を開きます。

「ただいま」

「お帰りなさい。今日はちょっと遅かったわね」

ひよこりと居間から顔を出したのは御坂喜美恵^{みさかきみえ}。泉ちゃんを拾って育てた泉ちゃんの義理のお母さんです。少し前にもお話した通り、義理のお母さんにいじめられるなんてドラマな展開はなく、本当のお母さんのように泉ちゃんを愛してくれました。

「最近は何騒だつて言うからねえ。気をつけなさいよ。可愛いんだから」

たたんでいたのだろうか、取り込んだばかりらしい洗濯物を持って居間に引つ込みながら泉ちゃんに声をかけました。その声は優しく柔らかく、とても温かいものでした。

その声に泉ちゃんは嬉しくなりました。同時に、少し心苦しくなりました。まだまだ自分は子供で、こんなにたくさんの恩を貰っているのに、一つも返せないことが。

だから精一杯、元気に返事をすることにしています。

「うんっ。気をつけま〜す」

「うふふ……」

泉ちゃんの元気な返事に居間から嬉しそうに笑う声が聞こえてきました。この家族に拾ってもらって、本当に幸せだと嬉しさを噛み締めました。

とんとんっ、と足取り軽く泉ちゃんは自分の部屋に向かいました。

「ふう〜……」

ばふつと泉ちゃんはベッドに倒れこみました。

夕食後、お風呂に入り、パジャマに着替え、後は寝るだけです。他にすることは特にありません。買っていた文庫本はもう全て読んでしまいました。けっこう暇です。

(どうしよっかなあ)

今の時刻はまだ九時前。昔の時代ならいざ知れず、今では小学生でも九時に寝る子供はいないでしょう。と言うわけで、泉ちゃんもまだまだ眠気は来ていないのであります。

(ゲームでもしよっかなあ)

泉ちゃんの部屋には携帯ゲームがあります。しかしソフトは全てクリアしてしまっています。それ以外のゲームと言えば、早戸はやとくんの部屋にあります。

音楽を再生していた携帯電話を停止して、部屋の灯りを消してから早戸くんの部屋に向かいました。向かう、といってもすぐ隣ですが。

ガチャ……。

躊躇いなく泉ちゃんは部屋の扉を開きました。まあ相手は義理とは言え弟ですから、別に着がえていても気にしません。見たいとも思いませんが。

なので気にしないで部屋に入ったのですが……。

「早戸く暇だからゲームしよう！」

片手を上げつつ、泉ちゃんは部屋に入ったそのまま首を傾げまし

た。

泉ちゃんの視線の先には部屋の中央にあるテーブルにアルバムを広げ、カーペットの床に早戸くんが座っていたからでした。泉ちゃんが部屋に入ったのにも気づかないようで、ただじっとアルバムを見つめています。そんなに面白い写真なのでしょうか？

「早戸？」

「ッ！？どわっ！」

ようやく泉ちゃんの存在に気づいた早戸くん。慌てて覆いかぶさるようにしてアルバムを隠しました。訳がわかりません。泉ちゃんは首を傾げたままです。

いそいそとアルバムをしまい込み、早戸はようやく一息ついて泉ちゃんの方に顔を向けます。

「い、泉姉いずみねえ、どうしたの？」

「いや、携帯ゲームはやっちゃったし、暇だから早戸のところのテレビゲームで対戦でもしようかと……ってというかアルバム見てたんでしょ？どうして隠すの？私にも見せてよ」

「い、いや……と、友達との写真なんだ。恥ずかしいのもいっぱいあるから……」

「なによう……見せてくれたっていいじゃない。ぶーぶー」

頬を膨らませる泉ちゃん。本人はそんなつもりないのですが、どうしても可愛いです。眼福であります。

「で、なんか用？泉姉」

「そうそう、ゲームしようよ」

「じゃあ昨日もやったやつでいい？」

「うん！」

とりあえず泉ちゃんはアルバムに持っていた興味を失ったようです。ホッと胸を撫で下ろす早戸くん。

慌てて隠したアルバムの正体、それは……泉ちゃんの写真集！とにかく泉ちゃんが映っている写真を集めて、一つのアルバムにしたのがそれです。早戸くんはそんなアルバムを眺めてにへらあ〜としていたのです。まあなんとも乙女ですね。

そんな感じで、夜は更けていったのです。

朝。カーテンを透かして光が泉ちゃんの白い頬を淡く照らします。ん〜と声を漏らしながら数回寝返りを打って、ようやく泉ちゃんは体を起こします。半分だけ開かれた瞳はうるんでいて、少し開かれた唇は艶やかで、ものすごい色気です。人前に出て有名になるような美人とはタイプが違う泉ちゃんですが、今回はもう男女問わずドキツとしてしまうほどでした。一八禁クラスです。ダメですよ、泉ちゃん。そんな無防備な姿をさらしてちゃ。

そんな泉ちゃんの姿を早戸くんが見かけてしまつて悶々としてしまつ事件があつたのですが、まあそれは置いて。

制服に着替えて、今日も学校です。高校二年生になり、季節は春過ぎしやすい気候なので泉ちゃんが呆けてしまうのも少しだけわかる気がします。それでもけじめのいい泉ちゃん。顔を洗つて朝食を

食べ、眠気はすっかり吹き飛ばしました。早戸くんに置いてくなくよ〜と言われるほど早い準備を終え、追いついた早戸くんと一緒にてくてく学校に向かいます。

何気ない朝の風景。ピリツとした違和感を、泉は確かに感じていました。最初は勘違いだろうと思っていたのですが、その違和感はなくなか消えてくれません。それどころかどんどんはつきり感じてきました。隣の早戸くんは普段通りです。彼は感じていないのでしよう。もしかすると泉だけなのかもしれません。

(いったい……何……?)

違和感是不快なものとして積もるばかり。だんだん違和感が泉の中で危険なものとして変化してきました。

普通なら、気のせいだと振り切って放っておくのですが、泉は違いました。彼女はいつも最善の行動を取るように心掛けています。そんな心掛けが、彼女に好感を持たせる要因でもあるのですが。泉は自分が感じている違和感が気のせいだった場合と気のせいじゃなかった場合の両方を警戒することにしました。超常現象を100パーセント信じるわけではありませんが、万が一ということがありえないとも言えません。

とりあえず、違和感の原因を見つけなければいけません。

「あ、早戸。忘れものしちゃった。まだ時間大丈夫だね。取りに帰るから先行って」

「うんわかった。でも珍しいな。泉姉が忘れものなんて」

「何〜？その目は。私は完璧人間じゃありませんよ〜」

冗談を挟みつつ、来た道を引き返します。

早戸くんから離れても、場所を変えても、違和感はず変わらず感じ続けています。なら、と歩く方向を変えてみます。しかし違和感はず変わらず、ただ強くなりつつあるだけでした。

しばし立ち止まり考えます。違和感の候補として何が考えられるのか。

(もしかして、病気が何かかなあ……)

もしそうなら早く病院で診察を受けるべきです。体調が悪いと言って家に帰れば病院には行けます。少なくとも家に帰るという選択は間違っていないかったと判断して、泉は家に帰ることにしました。

家への帰り道をゆっくり歩きます。けれど、違和感、不安な気持ちは一向に消えてくれません。

突然、泉の頭にピリツと痛みが走ります。続いて、声がかすかに聞こえました。けれどそれは明らかに現実の声と違うものでした。幽霊、なんて単語が泉の脳裏をよぎります。

(……い……よ)

ぴたりと足を止めます。

感じていた違和感は明確な気配として泉に近づいてきています。徐々に強く。

(……い……もべよ)

頭痛も次第に強くなり、額に手をやる泉。何か、見たことのない光景が頭をよぎる。その光景は二種類ありました。まったく身に覚えのない光景。どこか見たことのあるような気がする光景。

頭に響く謎の声は気配と頭痛が強くなるのと一緒に鮮明になります。

「いつ……たい……何なの……？」

声に出して呟きました。それは泉にとって無意識による自分を確認するための行為だったのかもしれない。

（来い。我が僕よ）

今度ははっきりと聞こえました。確かな、呼び声です。ズクンと頭の痛みが増します。

「い……嫌、よ……」

頭を押さえながらゆっくりと泉は頭を左右に振りました。何か、引つ張られるような感覚と、押さえつけられるような感覚。

「私、は……あなたの、僕なんかじゃない！」

さらに強くなる違和感と頭痛。

誰の声かわかりません。どこから聞こえているのかわかりません。それでも、強い不快感に反発するような声を泉は漏らしました。

泉の意識は、違和感と頭痛に苛まれ朦朧としてきました。

（来い！）

再び強く呼ぶ声が聞こえたかと思った瞬間、泉の意識は失われてしまいました。

そして、泉のその後を知る者はいません。天影泉は……忽然と消えてしまったからです。

この、『世界』から。

本来なら彼女が世界を渡ることはありませんでした。

しかし、そのことも運命だったのでしょう。

彼女は、天影の血を引いています。その身に世界を内包し、世界を改変する力を持つ、『ワールドトラベラー世界旅行者』の血を。

どこかの、違う世界。

長い白銀の髪と黄金の瞳を輝かせた青年が一人。

「歩みなさい。成長しなさい。そして、愛を知りなさい」

ぼつりと呟かれた言葉は曖昧に消えていきました。

呟いた青年の瞳は涙に濡れて、とても優しい光を湛えていました。

「う……んう……」

私は、ゆっくりと瞼を上げる。

上を向いて、何か柔らかい物の上に私は寝ていた。

視界に入ってきたのは、ただ、白。白く、白く、白く、白く、白に埋め尽くされて、その白だけが、私が目を開けていると自覚出来る材料だった。

後ろに手を着いて、私は体を起こした。手を着いた後ろからサクリと音が聞こえた。何の音だろう。

体を起して見えた景色もやはり白。けれど、ぼんやりと何か舞っている。

(これって……雪……?)

手を差し出して、私の手に舞い降りたのは確かに雪。
まだぼんやりしていた意識がようやくはっきりしてくる。そして、
ようやく今の状況を理解することが出来た。

「JJJ……どJJJ……？」

私は、吹雪の中、雪山の山頂付近にいた。学校の制服姿で、学生
鞆を持って。

「……ぬあ〜！」

あ、おかしくなっていないのでご安心を。何となく叫びたくなくなっ
ちやっただんです。

だって、女の子だもん。

……余計に空しくなった。

そこまで考えて、私が結構余裕なのに気付いた。

暗い場所。

どこかの地下室なのでしょう。吊るされた灯りが淡く石の壁や床
を照らしていました。

「成功……したのですか……？」

その地下室の中には甲冑姿の兵士が五人。その中央辺りには魔方
陣と黒いローブ姿の男。

兵士の一人が呟きました。その呟きに黒いローブ姿の男は答えま

す。

「術式に綻びはなく、魔力は消費され、確かに召喚術は成功した、のだが……」

さつきまで閃光を放っていた魔方陣を男は静かに見つめます。

本当なら、そこには男が召喚したがっていた最強の魔物が、絶対服従の刻印を刻まれて存在するはずでした。しかし、魔方陣の上には何もありません。

（だが、進歩はあった）

男は研究を続ける決意をしました。

今までの召喚術は発動しても一切の反応がありませんでした。しかし今回は魔力を吸収し魔方陣は輝いたのです。

ただの失敗ではありません。とても大きな進歩です。

もしかしたら何か召喚され、どこかにいるのかもしれない。

「おい、王にご報告しろ。召喚術自体は失敗したが、魔力の消費と閃光が確認出来た。もう間もなく完成するだろう、と。もしかしたら近くに何者かが召喚されている可能性がある。その警戒の要請もしておけ」

そう言い残し、報告に向かわせた兵士以外の兵士に地下室の片付けを任せて、男は部屋を後にしました。

地上に上がり、ゆっくりと城の廊下を自分の研究室に向かって歩きながら男は右手の刻印を見ました。

男の右手に刻まれた刻印、それは召喚したものが自分に刃向わないようにする刻印でした。

それに視線を落とした瞬間、わずかに痛みのようなものが走りま

した。

そのことに、男は思案します。

(やはり、何か召喚されているのか……?)

召喚そのものが失敗しているのなら刻印は反応しません。刻印が何か別のものに反応したのか、本当に何か召喚されているのか。

ゆっくりと男は窓から空を見ました。見上げた空は何か不吉な未来を告げるように、暗い雲で覆われていました。

第二話「氷結の雫」(前書き)

いよいよ泉ちゃんに仲間が！可愛い妖精さんです。
ではどっぴぞー！

第二話「氷結の雫」

全ては白。ただひたすらに白。

けれど、そこが雪山で、その山頂付近だと理解するとようやく白が雪なんだと理解出来てきました。

地面は結構な急斜面で、泉はクレーターの^{いすみ}のように穴の開いた平らな部分で座っていました。周囲には木々は見え、遠くにはうっすらと山々の影が見えます。その影の高さからこの場所が比較的山頂に近い場所だとわかります。

泉はパニックを通り越して呆然と辺りを見渡していました。どうやらあまりに非現実的な状況に遭遇し、思考が停止しているようです。

頬を打つ雪交じりの強い風によろやく泉は我に返ります。

(ここどこ……？っていかどうして……)

先ほどまで通学路にいたはずでした。

順番に泉は思い出します。

違和感を感じて帰ろうと通学路を逆走し、頭痛と何者かの声が聞こえて、意識を失い、気がつくところの場所に。

さっぱりわけがわかりません。とにかく現実逃避することを止めて、ここが確実に常識が通じないところであることを認めなければいけません。

そこまで考えてあることに気が付きました。

(あれ？どうして私、寒くないの……？)

よく考えてみれば、ここは明らかに極寒の地。泉はいくら制服の冬服とはいえこんな場所では一切防寒の役割を果たしません。

しかし、泉は今一切の寒さを感じていませんでした。もしかして寒過ぎて感覚が麻痺しているのかと思いましたが、手足の感覚はつきりとしていて、意識を失いそうな強烈な眠気も感じていません。

サクリ。

背後で雪を踏むような音が聞こえました。

泉が振り返るとそこには一羽のフクロウがいました。ぴたりと泉は固まります。

(何でフクロウ？普通雪山にいないよね？あれ……？そもそもここは雪山なんかじゃなくてホントは寒くないのか？)

腕を組んで首を傾げますがさっぱりわかりません。

「貴女様あなたは、一体どういったご用件でここへいらっしゃったのですようか？」

「にゅわっ!？」

男とも女ともつかない綺麗な不思議な声がしました。その声はどつやらフクロウからしているようです。

驚きに飛び退きながらも、泉はじつと目の前にいる真っ白のフクロウのを見ます。聞き違い、ということではないようです。吹雪いている中、鮮明に聞こえたのですから。

驚きと困惑で泉が再び固まっていると、フクロウからまた声がしました。

「あの、聞こえてらっしゃいますか？」

「え、あ、はい」

とりあえず返事をしてみます。

「困惑して、いるようですね。ではまず初めに自己紹介させていただきます。わたしは雪と氷を司る妖精。妖精の中でも最高位に属する存在です」

白いフクロウはペコリと器用に頭を下げながら言いました。

「はい？」

キョトンとして泉がそんな声を漏らしてしまうのも無理ありません。

非現実的な現象は突然雪山にいたことで満足なのですが、今度は妖精さんです。見事に妖精と自分で言いました。しかもそれを言ったのが真っ白のフクロウです。近くで誰かが喋っているのでも、スピーカー等が取り付けられているのでもない様子です。

(何でフクロウが喋っているの？ってどうか妖精？)

落ち着いて、よく考えようと泉は胸に手を置いて深呼吸しました。

「あ、あの……どこか至らぬ点がありましたでしょうか？」

おずおずと咳かれた不安げな声。それは自らを妖精というフクロウでした。

「何が？」

泉は普通に聞き返すことが出来ました。

(…………私って、順応能力高かったんだ)

なんだか複雑な気持ちになりましたが、とにかく泉はフクロウと話をすることにしました。

「わたしはずいぶん長い時の中、この雪山で過ごしましたので人間の常識などに疎いのです。日常生活に必要な知識や語学はある程度出来ていると思うのですが……それもずいぶん昔のことなので正しいかどうか判断出来ません」

フクロウは下を向いてどこかしょんぼりしている様子です。

「先ほどのわたしの言動や行動に何か不快な点がありましたらどうぞ遠慮なくお申し付けください。望まれるのでありましたら、わたしのこの存在、この命で償う覚悟であります」

「ちよつ！そんな命でなんて…………」

すごく物騒な発言に泉は思わず声を上げてしまいました。

とにかく現状をどうにかしないとダメですね。

まだ完全に理解と納得は出来ていませんが、とりあえずここはいわゆる『ふあんたじー』な世界で、泉はそこへ通学路から召喚されてしまったのだと仮定することにしました。

笑ってしまいそうなことですが、現実逃避をしてないで行動を起こさないといけません。

「…………私の名前は天影泉^{あまかげいすみ}。あなたの名前は？」

そう言えばやっぱりここって雪山だったのか、とか思考を巡らせながら泉はそう尋ねました。

寒くないので地面というか雪の上にお尻をつけてペタンと座ります。最初はしゃがもうかと思っていたのですが、泉の制服のスカートは短いので断念しました。

「わたしたちのような超越的存在は名を持ちません。名は存在を示し、確定するもの。わたしたちは名に縛られないのです」

「へえ〜そんなもんなんだ……」

適当な相槌を打ちながらふむふむとうなずきます。

とにかく現在わかったことはこの妖精だという目の前のフクロウは泉に対して丁寧な態度を取ってくれていて、質問に答えてくれること。

(なら、ここで聞きたいこと全部聞いちゃえばいいかな)

質問してもいい?と前置きをしてから、色々聞いてみることにしました。

「ここってどこなの?」

「ここは五つある大陸の内、一番大きなユーリア大陸の北の地。セルビア王国のさらに北にあるトルンという大きな雪山の山頂付近です」

「……………」

もう完全に異世界なんだ、と黙り込んでしまう泉。はあ、とため

息をつきました。

「あの、どうかしましたか？」

「ううん。何でもなし。続き、いい？」

「はい。では質問をどうぞ」

「じゃあ……ここって雪山で、それも山頂付近で、吹雪いていることに間違いないんだよね？」

「はい。人なら数分で凍死してしまう極寒の山です」

「なんで私は寒くないの？」

それは泉にとってなかなか重要な質問でした。

ほとんどの生物が死に絶える極寒地獄。そんな場所にいる泉はとにかく自分の安全を確保しないとけませんでした。

現在は寒くなく、安全かもしれませんが、『ここ』には妖精が存在するのです。魔法が存在してもおかしくありません。なら現状が魔法によって守られているという状況かもしれない。それならどういった原理でその守護が効いているのか確かめないとけません。でないといつその魔法かもしれない何かが無くなってしまいかかわらないからです。

「それはわたしが周囲の冷気を支配して貴女様を蝕まないようにしているからです」

そう言えばフクロウさんは雪と氷を司る妖精だとか言っていました。フクロウが泉を守ってくれていたようです。

「どうして、あなたは私を守ってくれているの？」

そう泉が言った瞬間、轟ごう、と音を立てて雪が舞い上がりました。台風のような暴風が吹いていたようですが、その一切が泉に触れることはありませんでした。

何かバリア的なものが泉を包んで守っているようでした。白いフクロウの話から推測するに、周囲の冷気や雪などを直接操って泉を守っているのかもしれませんが。

舞い上がった雪はすっかりフクロウを包みこんでさらに真っ白になりました。そして、その真っ白い雪の塊は急激に大きくなっていきます。

(なにになに！？これって襲われちゃう展開じゃない！？)

なんだか不穏な雰囲気です。

大きくなった雪の塊は急に晴れて、その中には……。

氷で出来た女の人がありました。

「は？」

もう何度目かわからない驚きの声を泉は上げました。

それも無理ありません。なにせ雪の中から純粹な水晶のような透き通って青みがかかった、おそらく氷で出来ているであろう女性の彫刻があったからです。一切のくもりなく、雲を透かして通ってきた太陽のわずかな光で輝いていました。

その女性の彫刻は雪の上に座り込んでいる泉の前に跪いた姿勢でいました。そしてはつきりと、真っ白のフクロウと同じ声で話します。

「わたしが貴女様に惚れ込んでしまったからです。性別の存在しないわたしたち妖精に惚れるということはありませんが、現在わたしが知る言葉の中で最も適切な言葉がこれしかなかったのです」
「……………」

突然の告白発言。もはや泉はぽかーんと口を開けて黙るしか出来ません。ちなみに女性の彫刻は裸で、泉ちゃんはちよっぴり赤くなっていたりします。

「貴女様の存在に魅せられてしまいました。どうか、どうかこれからの永遠を貴女様に捧げさせてください。わたしの存在、命、魂を支配してください。わたしを、貴女様の奴隷にしてください」

何でやねん、とか泉ちゃんは言いたい違いありません。もの凄い急展開に全然ついていけないようです。

「いけないでしょうか？」

女性の彫刻の妖精は跪きただじつと頭を下げ続けます。

(よし、とりあえず冷静に整理して考えよう)

泉はそんな告白をされても応えられないし、応える気もありません。誰かを奴隷にして楽しむ趣味も持ち合わせていません。

ですが妖精さんの助けなしでこれから生きていけるかどうかわかりません。まだまだわからないことばかりです。味方は多い方がいいでしょう。

(うーん……縛りたくないなあ……)

奴隷と言っ言い方はとても心苦しいのですが、その采配は全て泉次第です。ここは心を決めるしかないでしょう。

「わかった。私の味方をしてくれるんだよね？」

「はい。たとえ世界がてきだったとしてもわたしは貴女様の盾になりましょう」

すると妖精は表情のない氷で出来た顔を上げてすつと右手を泉に差し出しました。

「では契約を。わたしが貴女様の剣であり盾であるという証明を」

「私は何をすればいいの？」

「わたしに名をくださいませ。わたしの存在と魂と心を縛り付ける名という枷をお与えください」

名とは『存在を示し、確定するもの』と妖精は言っていました。ということは契約によって泉に逆らわない確定された存在になりたということなのでしょう。

泉は揺らぎと濁りのないまっすぐな好意に複雑な気持ちになりました。

そして少しの間、泉は思考に浸ります。この契約で与える名は、存在を示し確定する、新たに魂を与えることに相当します。ふざけて名を考えてはいけません。

(んう……候補はいくつかあるんだけど……)

ふと最近辞書の中で見つけた気に入った言葉を思い出しました。面白そうと買った様々な言語の辞書。ほとんどが手をつけていないものばかりです。暇なのでベッドに寝っ転がって広げていると見つけた言葉でした。

(うん。これにしよう。なんかカッコイイし)

結局軽いノリで決めてしまいましたが、妖精の存在を明確に示す良い名だと泉は思いました。

(我ながら良い出来だと思う)

そう泉は少し微笑みました。

「決めたよ。あなたの名前は

『ジュレ・ロゼ
氷結の雫』

凄まじい光が瞬きました。それは黄金の輝きでした。金色に泉の視界が染まっていきます。その光景に泉は黄昏の時間を思い出しました。悲しく切なく、でもどこか暖かい、そんな黄昏を。

辺り一面が黄金に染まっています。泉自身から黄金の光が出ているようでした。

そんな黄金の光の中で、静かに、でも確かに声は響きました。妖精の透き通ったあの声でした。

「ありがとうございます、我が主人。ご主人様のくださったこの名を胸に、わたしはご主人様に絶対の勝利を約束しましょう」

「うん、よろしくね、ロゼ」

「よろしくお願ひします、ご主人様」

泉はなんだか背中がむずむずする思いでした。しかし妖精、ロゼの声は満足げで、しばらくはご主人様という呼び方に我慢しようと思つた泉でした。

すると、まるで濁流のように様々な知識が泉の頭の中に流れ込んできます。それは契約によるものでした。

思念による意思疎通が出来るということ。契約を通じロゼの知識を泉が得られること。しかし、契約は基本一方通行のもので、泉の知識をロゼは得られないこと。他にも色々知識が流れ込んできましたが、あまり多くの知識を詰め込んでも疲れるので今日はここまでしておくことにしました。

その知識の中に、ロゼは基本、本物の雪のように辺りを舞っているのですが、魔法により大きさに制限はあるものの、ある程度は姿を変えることが出来るというものがありません。

契約というものの確認のためにまずそれを試してみることになりました。

(どんな格好がいいかなあ……これから人里に下りるならやっぱり人型がいいよね。となると容姿か……連れて歩くことも考えると……)

イメージを膨らませていると、黄金の光はだんだん治まってきました。泉のイメージが固まるその瞬間、目の前にいたロゼは立ち上がりました。

しかし、その姿は氷の彫刻のような姿ではなく、泉のイメージ通りの姿でした。

「ご主人様、新しい姿をありがとうございます」

恭しく綺麗に頭を下げるロゼ。

妖精、という言葉にふさわしい美しい少女でした。雪のように長く白い髪。宝石のように輝く翠の瞳。ビスクドールのように透き通った肌。白くふんわりしたワンピースに身を包んだ少女がそこにいました。年齢は身長から見ると泉より年下でしょう。

（おお、ホントに魔法だ）

本当にイメージ通りの姿になったことに驚きながらも泉は満足げにうなずきました。まあロゼの容姿がこんなことになった理由は泉ちゃんが可愛いものが好きなのと、単に抱き締めるなら美少女だと若干変態っぽいことを泉ちゃんが考えていたからでした。泉ちゃん、いけませんよ、そんな邪なこと考えてちゃ。

基本冷静な泉。そして他人とは違う考えを持つことを自覚しています。だから、彼女は自らの異常性、その意味をまったくわかっていません。普通なら、こんなあつさりした冷静な対応なんて出来るはずがありません。彼女はそれを軽く行ってしまう危険性に全く気付いていません。

そして泉は、真つ先に疑問に思わなくてはいけない部分に気付いていません。彼女はその部分をあつさり通り過ぎてしまうほど楽天堂ではないにも関わらず。

なぜ妖精が泉に惚れてしまったのか、その理由に興味を持たないのでしょうか？

彼女の失われてしまった記憶が彼女を導いているのかもしれない。それは誰にもわかりませんが、これだけは言えます。これから始まる泉の旅は確実に、何らかの意味を持つ、ということが。

泉はこれからのことを考え始めたようです。

強力な味方が出来たことでとりあえず身の安全は保障されました。泉の目的は元の世界に帰ること。現在は情報不足なので、情報を集めるための旅に出るしかないでしょう。

旅に出るにしても泉の知識はあまりに足りません。なのでもうしばらくはこの山頂付近にとどまり、ロゼから知識を引き出すことにしました。そのため、食糧や寝床をどうするか悩み始める泉でした。と、泉の異世界生活が始まりました。最高位の氷の妖精『氷結の雫』を従えて、彼女の運命はどうなっていくのでしょうか。

第三話「雪山に住む姉妹」（前書き）

遅くなりました！

読んでくださっている方がいるようで、嬉しいです！

今回、泉ちゃんは一人の少女と出会います。その不幸はありふれたものかもしれませんが。もしかしたらこの現実でも起こりうる可能性のある不幸かもしれません。けど、それを許すことはできません。だから戦います。それが、泉ちゃんの起源なのですから。

ずっとシリアスな感じで突き進んできちゃってるんで、明るいお話が書きたいですね……。ではどうぞ……。

第三話「雪山に住む姉妹」

一人の少女が必死に山を登っていました。ざく、ざく、と雪で覆われた純白の斜面を踏みしめ、少女はひたすら前に進みます。

「はあ、はあ……」

始めは走っていたけど、すぐに走れなくなってしまいました。普段の少女ならもつと頑張ることが出来たでしょうが、今は、気力が持ちません。

止まってしまいそうな足を、前へ、前へ。荒い息で、それでも前へ。

「おねえちゃん……」

無意識のうちに少女は小さく呟きました。その呟きが自らの耳に届いて、悲しく、苦しくなって、姉の言葉を思い出して次の一步を踏み出します。

「私は大丈夫だから。フルールは逃げなさい。安心して。私も後でちゃんと追いつくわ。だからほら、泣かないで。いい？フルール。まっすぐ山に向かって歩きなさい。村に降りてはダメ。まっすぐ山を越えるのよ。そしたら海が見えるわ。見たかったでしょう？海」

少女の脳裏に響く優しい姉の声。優しい、笑顔。

「私は大丈夫よ。お姉ちゃんを信じなさい」

その言葉を聞いて、少女は、生まれたところから住んでいる山小屋

から走って山を登り始めたのでした。

少女の両親は病ですでに他界し、家族は姉一人。大好きな姉。だから、少女は姉の言葉を信じてひたすら歩きます。姉の言葉が、『大丈夫』という言葉が、嘘であるとわかっているとしても、少女は信じて歩きます。少女には、それしか出来なかったからです。どうにも、出来ないのです。

じわつ、と。涙が浮かんでいきます。それを服の袖で拭って、少女は歩きます。

年相応にその場に泣き崩れてしまえたらどれだけ楽だったでしょう。誰かにすがることが出来たならどれだけ癒されたことでしょう。たとえどうなるかわかっているとしても、姉と一緒にいることが出来たら、どれだけ幸せだったでしょう。

けれどそのどれもが少女には出来ませんでした。自分の幸せよりも、姉の願いを優先したかったからです。大好きな、姉の。

それは、世界のどこかでいつも起こっているありふれた不幸かもしれないかもしれません。そして、世界は、現実には、常に無慈悲で残酷なものかもしれません。でも、全てが全て、優しくないわけではないのです。人が人である限り、冷酷さや残酷さ、非情さは捨てきれないのかもしれない。しかし、優しい人がいなくなったらわけではないのです。

仕方ないと諦められない、諦めの悪い人なだけなのかもしれない。それでも確かに戦っている人はいます。『決意と信念』という名の盾を持ち、『優しさと理想』という名の槍を持って戦う人が。

その時少女は自分の目を疑いました。

まず見えたのは少女よりもさらに幼い少女でした。雪のような純白の長い髪。力強く理性的に輝く翠の瞳。人間とは思えないくらい美しい少女でした。

次に見えたのは、少女よりも背の高い、でも少し幼げに見える容

姿の少女でした。白にも見えましたが、光でキラキラと輝いていて、白銀の長い髪だということがわかりました。そして、黄金の瞳。

少女が息を吞んで自分の目を疑ったのは斜め後ろを歩いている黄金の瞳をした少女の方でした。なぜなら、女神に見えたからです。人間かと疑ってしまっうほど美しい翠の瞳をした少女よりもさらに美しい、どんな人間も一瞬で魅了されてしまいそうな美しさ。

山小屋を出て初めて他人と出会って安心したのか、ひたすら歩き続けてきた少女は歩みを止めて倒れてしまいました。今までの緊張と悲しさと、疲れが原因でしょう。気を失っていました。

少女に、少女とは反対に山を降りてきた二人が近寄ります。小さい方の少女が警戒しながら安全を確認し、黄金の瞳をした少女の方に声をかけます。

「ご主人さま、危険はありません」

「うん、でもこの子は一体……」

「おそらく精神的な疲労と肉体的な疲労によるものでしょう。命に別状はありません。いかがなさいますか？」

「……そんな長時間眠ってるってことはないだろうから、山を降りるまで時間もあるし、連れて行こうよ。もし山の麓の村にでも住んでるんだったら案内も頼めるし」

「了解しました」

気を失った少女の顔は蒼白で、一体何があったのか、気になるほどの様子でした。

翠の瞳をした少女に抱えられている少女にとって、この出会いは幸福となるのか、不幸となるのか……。

全ての終わりと始まり。私の大切な時間が突然終わりを告げて、大切な時間を取り戻すための旅が始まりを告げた。

変わらないと信じていた日常。無くならないと安心していった日々。会えなくなるとは思わなかった、愛しい人たち。全てを掴むには小さすぎる私の手だけど、絶対に落とすまいと握りしめていたはずの時間。そんなものが全部私の両手からこぼれ落ちて……。

だから私は取り戻す。何としてでも、大好きなあの日々を。そのためなら、私はなんだったとする。驚くのも、戸惑うのも、取り乱すのも、落ち込むのも、泣くのも全部後回し。

だから妖精さん。私に永遠の忠誠を誓って。私が理想を取り戻すための力になって。

「ご主人様」

小さく誰かを呼ぶ声。それはとても近くから聞こえて。どこだろう。私は寝ぼけた回転の遅い頭で眠る前のことを思い起こす。

知識をロゼ（愛称はロゼと勝手にきめてしまった）から引き出すための時間があるのでしばらくの間このふきんに留まっていようと思ったんだけど、食糧や寝床の問題を忘れていた。

どうしようかと悩んでいると急に睡魔に襲われた。どうやら私は精神的にとても疲労していた様子。自分では冷静でいたつもりでもやっぱり突然雪山にいたことに驚いていたんだと思う。とりあえず寝床だとロゼに相談してみると即席で雪のベッドを作ってくれと言われた。なるほど。それなら大丈夫かもしれない。ふかふかの雪で出来たベッドに寝っ転がり、その周囲を結界も兼ねた雪で覆ってもらう。さらに冷気を遮断してもらえば寝床として問題ない。

寝ると決まってもやっぱりぬくもりは恋しいもの。しかも今は温

かい抱き枕代りに使える可愛い女の子がいる。頼んでみるとあつさりオーケーしてくれた。基本的に主人である私の言葉には逆らわな
いらしい。例外は私の命が危険にさらされた時など。お言葉に甘え
させてもらって、ぬいぐるみのごとく抱き締めさせてもらって、し
ばらく眠ることにした。ロゼはどうやら自分以外の誰か、他の存在
と触れ合うことが久し振りらしく、初々しい反応をしてくれた。か
……可愛いイイイ！たまらず真っ白の髪に頼りしながら眠った。
ふざけつつも不安だったのか、涙が出そうになってしまった。

そうやって眠って、現在に至る。そして、可愛い声がご主人様と
呼ぶのは私のことだ。ちょっぴり恥ずかしいけど支障がないので我
慢。

「ご主人様、ご主人様のおっしゃった一日を二四に分けた内の一つ
の時間が経ちました」

「ん、ありがとう」

ゆっくりと身体を起こすと全面真っ白。まあ雪で作られた寝室だ
から当たり前か。雪山の山頂付近にある雪の箱を思い浮かべると苦
笑してしまった。

ちなみにこの世界の文化では時間の数え方が統一されていないよ
うで、しかも妖精で寿命のないロゼにとって時間という感覚はない
ようで、どうやって仮眠を一時間したいことを伝えようかと悩んだ。
結局さっきのロゼの言葉みたいな感じになってしまった。

たとえ一時間でも睡眠を取れたことでもいくらかは疲れが取れた。
こんな生き物のいない場所では食糧なんて手に入らないから結局山
を下りにした。ロゼに色々この世界のことについて教えても
らうのは山を下りながらにしようと思う。

山を下りる方法は、ロゼが魔法で作った雪に乗せてもらって一気
に、という方法もあるけど、今回は自分の足で下りにした。

こんな野蛮そうな世界だから少しでも体力をつけなくちゃ、というのとのんびり下りてその間に色々教えてもらおうという理由からだった。

山の麓にある村に向ってのんびり歩くロゼと私。私の前は道案内としてロゼが歩いていて。ひよこひよこ、と白い髪が左右に揺れている。なんとなく和む私。本当ならとつくの昔に疲れてへたり込んでいるはずだけど、今の私は全然余裕。おお、これが異世界補正！と喜んだんだけど、ロゼによると冷気や斜面の雪を操作して私の体力が減りにくいようにしてくれているらしい。ちよっぴり残念。

しばらくすると真っ白だった景色にも変化が訪れた。木々が見え始め、一気に視界が広がった。そしてさっきまで雪で覆われた空も見え始めた。

とても、綺麗……。この美しい景色が見れたことは、素直に喜んでいいかも。

またしばらく歩く。やっぱり北の地方なのか、足元から雪の白が消えることはない。さくさくと二人分の歩く音。しんどいのは嫌な私だけど、ロゼのおかげでゆっくり景色を楽しむ余裕がある。

突然、ロゼが片手を水平に上げた。

「……誰かいます。幼い少女が一人。魔力も感じられませんが、これといって怪しいところは感じられませんが」

それを聞いて私も警戒を厳にする。ここは魔法の存在する世界。何が起こつても不思議ではない。たとえば、少女の姿をした魔物とか、いるかもしれない。

本で読んだ無駄知識を活用する。腰を落とし重心を低く保つ。すぐにも動けるように。前方はロゼに任せ背後や側面を警戒する。けど、そんな心配は必要なかった。

少し進んで見えた少女は、目を赤く腫らしてふらふらした足取りでゆっくり山を登ってたから。そこで向こうからもこっちが見えた

んだろう。驚きに目を見開いて、緊張が切れたのか倒れてしまった。すぐにロゼと近寄ってロゼに確認をお願いする。やはり魔力等は感じられず、普通の少女の様子。

「ご主人様、危険はありません」

「うん、でもこの子は一体……」

「おそらく精神的な疲労と肉体的な疲労によるものでしょう。命に別状はありません。いかがなさいますか？」

「……そんな長時間眠ってるってことはないだろうから、山を下りるまで時間もあるし、連れて行こうよ。もし山の麓の村にでも住んでるんだつたら案内も頼めるし」

「了解しました」

短く答えたロゼはそのまま少女を抱える。おお、幼い少女がさらに幼い少女に抱きかかえられているって、なんだか微妙な光景。それからまたしばらく歩いたころ。

「んんっ……」

ロゼに抱えられてる少女がそんな声を上げた。

その少女にも私に掛けてもらっている耐寒の魔法をかけてもらって、雪の上にゆっくりと降ろしてもらっ。そして、少女はゆっくりと目を開いた。

「……あ……？……ッ……」

覗きこんでいた私とロゼの顔を数秒眺めた後、驚くほどの速さで少女は飛び退いた。本当に驚嘆に値する動きだった。きっと才能があるのだと思う。

寒くはないはずだけど、なぜか震えていて、こちらを警戒心丸出しの様子でこちらをうかがっている少女に、私は努めて優しく話しかける。

「ねえ、大丈夫？ 私たちを見た後倒れちゃったんだけど、覚えてる？」

頭の中でロゼから引き出した知識を反芻する。契約のおかげで得た『言語』に関する知識を思い浮かべ、日本語に置き換えていく。その『言語』に関する知識はずいぶん昔のものなので現代に対応出来るのか不安だから、現代の言葉にも対応出来るように覚悟しておく。

「あ……ああ……」

状況を理解したのか、少女の瞳に理性の光が宿ってきた。

よかった。衰弱はしてるみたいだけど、大丈夫そう。それにしてもこの娘はとても賢い。これだけの短期間で状況を理解する頭の回転速度と、まずは状況を理解しようという冷静な対応はなかなか。

でも、なぜか少女の顔はわずかに赤い。どうして？ さっきまで警戒心丸出しで震えていたのに。寒くて青くなるんならわかるんだけど。

「落ち着いた？」

少し少女との距離を詰めて、優しくわずかに首を傾げて、もう一度話しかける。

すると、少女は一気に顔を蒼白にして、苦しそうに表情を歪めた。言おうか、言うまいか、どうするか悩んでるような、そんな表情をしているように、私は感じた。

寒い地方特有のゴワゴワした服の、少女の方に私はそつと手を置いた。

「大丈夫。話してみて。どんなことでもいい。私は、きっとあなたの力になってみせる」

なんで、こんなことを私は言ったのか……。ただ、この少女を放っておけなくなっただ。

それから、少女は震えながらも話してくれた。

山の麓付近に小屋があつて、そこに姉と二人で住んでいること。

山の麓の村は山賊に襲われて、小屋にもやってきたこと。姉が少女を一人逃がしたこと。

それからすぐに動き始めた。ロゼが魔法で制御する雪の上に乗る一気に山を下りていく。

なんで、そんなに迅速に私が動いたのか。なんで、利益のないことを、危険なことをやるうとしているのか。それは私の道徳心によるものではなく、ただ、嬉しかったから。誰かのために、私が何かを出来るということが。そして、許せなかったから。一人の少女が山賊たちに襲われていると考えると、私の中から何かが湧き上がってきて、どうしても我慢できなかったから。ただのお人好しなのかもしれないけど、これが私だから。それが私の行動理由。私の持つ、意味。

やはり魔法は素晴らしい。どうやらこの世界に魔法が存在することとは当たり前のようだが、あまり広まっていないらしい。それは魔法を使用するには才能と長い年月が必要となるから。だから連れてきた少女はキョトンとしていた。何が起こったかわからない様子。そんな間に少女が姉と二人で住んでいるという小屋に着いた。

空はすっかり晴れていて、明るい。そのせいか小屋の中の様子がわかりにくい。とにかく小屋の外に人影は見当たらない。

「ロゼ、中に何人いるかわかる？」

「はい。いずれも魔力は感じられませんが、気配を隠せるほどの者もないようで、その気配ははっきりと感じられます。人数は九人そのうち一人がその少女の姉だと思われまます」

少女、名はフルール。ヨハンソンというらしい、は少しうつむいて未だ震えている。ちなみに姉の名前はクレア。ヨハンソンというらしい。

「……じゃあ、急ごう」

「了解しました、ご主人様」

出来るならば、その姉妹に祝福を。

フルールは待たせることにした。おそらく戦いになる。もう『殺す』覚悟の出来た私は構わない。けどこの少女にそんな所は見せられない。もう一度ロゼに耐寒の魔法と守護結界を頼んで待つてもらうことにした。

小屋に近づくと話し声が聞こえてきた。脆い作りなのかもしれない。少なくとも防音が出来る作りではない。

「なあ、もういいだろ？」

「まあ、さすがにもう生き残りはいないか。お頭はまだ村の方にいるが、少し楽しむくらいはかまわん」

「へへ……ちよつと幼いが綺麗な顔と身体してるじゃねえか」

そんな声を聞いた瞬間、目の前が真っ赤になった気がした。

「『ジュレ・ロゼ氷結の雫』」

「了解しました」

基本的に、ロゼの考えや知識などは『契約』を通じてこちらに流れてくるが、私のは流れていかない。でも、『命令』は別。

黒くドロドロした感情と考えのままに、『真名』を呼び、心の中でロゼに命令を下す。ロゼは素早くそれを実行に移した。

まるで私の冷たく熱い怒りと憎悪のように、周囲は一瞬にして極寒の地獄へと変わる。それは私が最初にいた山頂付近の様子と似ていた。人どころか生物は存在することを許されない世界。小屋や周囲はパキパキと音を立てて凍りつき、空気はキンと張り詰める。離れた場所で待たせているフルールちゃんには耐寒の魔法をかけてもらっているので大丈夫。もちろん、小屋の中にいる彼女の姉、クレアにも耐寒の魔法をかけてもらった。

私が小屋の扉に近づくと、ロゼが私の前に歩み出た。扉の表面を撫でるように手を一閃。ロゼの手が振りぬかれた瞬間、ガラスの碎けるような音を立てて扉が粉々になった。

さあ、戦おう。無力な私は全てロゼに押し付けてしまうかもしれないけど、それは私の責任。だから私は、『殺す』覚悟、『背負う』覚悟をして、力強い一步を踏み出す。それは、ただ私がこの世界に来て心細くて、寂しい心を満たすためだけに少女たちを救おうとしているのかもしれない。けど、もう決めただ。

私はこれから、人を殺す。

不思議と怖くない。人を殺すという行為に、恐怖を感じていない。嫌悪感を抱いていない。それは、私が壊れているから。どうしようもなく、人として壊れているから。

小屋に入って、私に視界に入ってくるのは八人の男と一人の少女。少女は両手を縛られ、服を裂かれ、床に倒れていた。見える白い素肌はわずかに痣が見えて。

私から黄金の光が溢れて、けど、私はそんなことを気に出来なくなるくらい激情に満たされて。

「『ジュ・コロゼ氷結の雫』、殺して」

「了解しました」

短く簡潔に。冷たく無情に。命令を下した。

きっと、私はもう戻れない。あの頃の私には。でも、それでも、私には譲れないものがある。

第四話「悲劇には奇跡を」(前書き)

読んでくださっている方が増えていきます！ありがたい限りです！

今回は初の戦闘シーンがあります。でもほんの一瞬の出来事ですので……。

ご意見ご感想お待ちしております！

それではどうぞ！

第四話「悲劇には奇跡を」

私は、走り去っていくフルールを見て、安堵のため息を吐いた。全ての始まりは、私が買物に村まで降りていた時のこと。響く怒声と悲鳴。汚れた格好をした見知らぬ男の人たち。私が呆然としていると仲良くしていた魚屋のおじさんが声をかけてきた。

「山賊が襲ってきた！かなりの数だ！おまけに魔術師までいる！妹と一緒に早く逃げろ！」

それを聞いた瞬間、私は走り出した。くらくらしで、もつれそうになる足を無理やり動かして、痛いくらいに激しく動く心臓を無視して。

両親はすでに他界して、私には、家族はもう妹しかいない。もう、妹だけ。だから、失いたくない。私の何を引き換えにしても。絶対に守りたい。

「フルール！」

「?どうしたの?おねえちゃん」

両親が残してくれた、山の中腹部にある小さな小屋の扉を開け放ちながら叫ぶ私に、愛しい妹は可愛い声で返事してくれた。

よかった。ここにはまだ来ていない。

「いい?フルール。とっても大切なことだから、よく聞きなさい」

「う、うん。わかった、おねえちゃん」

必死の形相で肩を掴んで言う私に、戸惑いながらもフルールはうなずいてくれる。

そして、私は出来るだけ早く、でもわかるように説明した。悪い奴らが襲ってきたこと。一刻も早く逃げなきゃいけないこと。

「私は大丈夫だから。フルールは逃げなさい。安心して。私も後でちゃんと追い付くわ。だからほら、泣かないで。いい？フルール。まっすぐ山に向かって歩きなさい。村に降りてはダメ。まっすぐ山を越えるのよ。そしたら海が見えるわ。みたかったでしょう？海」

怖くて泣きそうになるのをこらえて、同じく泣きそうになっているフルールを安心させるために微笑みを浮かべる。震える手を押えてふわりふわりと優しく頭を撫でる。

「私は大丈夫よ。お姉ちゃんを信じなさい」

そう言ってフルールだけを山頂の方角にある窓から外に出させて逃げさせる。

フルールは、一瞬私の方を振り返って、一生懸命走って去って行った。

よかった。これで、フルールはきつと生きていける。そんなに簡単に生きていける世界じゃないことは知ってる。けど、少なくとも村と反対方向に逃げれば山賊たちに襲われる可能性は少なくなる。そして、ここに私だけ残れば山賊たちが追いかける可能性は少なくなる。この、大人でもめったに入っていない山で、二人で生きてきた。病弱で、すぐに寝込んでしまう私を支えて、懸命に生きていた、あの子なら。きっとこんな無慈悲な世界でも、ひとりでも生きていける。

ああ、神様。私はどうなっても構いません。この身が蹂躪されようとも、引き裂かれようとも、朽ち果てようとも、あの子が、フル

ールが幸せならそれで満足です。だから神様、あの子に祝福を。
フルールが走り去ってすぐ、荒々しい雪を踏む足音と共に、私
ちの家の扉が開かれる。

頑張らないと。あの子の存在が悟られないように。

「ああ？娘が一人か……」

「……？どうされたんですか？両親でしたら少し前に病気で他界し
てしまいましたか……」

冷静に、冷静に。私一人であると思ってくれるように。

「チツ……山へ続く道があるから他にも誰かいるのはわかってたけ
どよお、小娘一人かよ」

「村に戻ってとっとと男ども殺して楽しもうぜ」

「まあ待て。もしかしたら山の方に逃げてくるやつがいるかもしれ
ん。もともとそういうやつを殺すのが俺たちの役割だ。お頭の計画
を狂わせるなよ」

「へえーへえー。しかしよお、別に捕らえた端から遊んでもいいん
じゃねえか？」

「その場合国の騎士団やらに見つかる可能性がある。情報が漏れな
いように男は速やかに殺し、女子供は捕らえて女で楽しむのは後か
らだ」

「従おうぜ。そういう慎重なお頭のおかげで今まで捕まらずに来た
んだからよ」

「まあ、実力は確かだからなあ」

意識して、きよとんと意味がわかっていない様子を装う。怯えちゃいけない。反応しちゃいけない。私は何も知らない女の子なんだ。ぞろぞろと男たちが小屋に入ってきて、私はそのうちの一人に押し倒された。

地獄が始まった。けど、これでよかったんだ。あの子が少しでも幸せに生きてくれるなら、それで……。

服は引き裂かれ、何度も殴られて、今の私はきつと酷い状態になつてるはず。

痛い。痛い。イタイ。怖い。怖い。コワイ。けれど、私には抵抗すら許されない。愛しい家族、フルールのために耐え忍ぶことが私の役割なのだから。

「なあ、もういいだろ？」

「まあ、さすがにもう生き残りはいないか。お頭はまだ村の方にいるが、少し楽しむくらいはかまわん」

「へへ……ちょっと幼いが綺麗な顔と身体してるじゃねえか」

そんな声を聞いて、ああ、私はこれから壊されるんだと思った。覚悟していたこと。こうなることは、わかっていた。私でよかった。妹じゃなくてよかった。妹が、汚されなくてよかった。

「『氷結の雫』」

「了解しました」

どこか遠くでそんな声が聞こえた気がした。

瞬間、パキパキという小さな音で周囲の環境が変わっていくのを感じた。暖炉の火は消え、男たちは皆ガタガタと震えながら床にうずくまった。何が起こったのか、まったくわからない。どうして男たちは倒れているの？

ガラスの割れるような音が響いた。

全身が痛い。けど、なんとか視線を音の方に向ける。私が視線を向けた時、ちょうど音と共に小屋の扉が砕けるところだった。

それはまさしく、私にとって『魔法』だった。

砕けた扉は宝石のように輝いてて。夢でも見てるのかと疑ったくらい綺麗で。私は、痛む殴られた場所と縛られた両手のことも忘れて、ただぼんやりとその光景を見詰めていた。

そして、小屋に誰かが入ってきた。私はその人を、女神だと思った。

この世の者とは思えないほど綺麗な白銀の髪。全てを制す王者のようで、けれど優しく包み込むような光を湛える黄金の瞳。透き通るような白い肌。誰もがその魅力に囚われてしまうと確信できる美しい容姿。その人こそ、間違いなく女神だと思った。

女神様は、きゅっと小さな唇を閉じて、震えて床に伏す男たちを睨んでいた。怒ってる。ああ、女神さま、私は構いません。どうか私よりも妹のフルールをお助けください。私は、痛みと恐怖による震えでそう懇願することもできなかった。

「『氷結の雫』、殺して」

「了解しました」

そんな声が聞こえて、女神様の後ろから小さな女の子が現れた。黒くて上質で綺麗で、とても高価そうな服に身を包んだ女神様と対照的に、真っ白の服を着た女の子。

そんな女の子はまるで騎士のように女神様の前に立つと、男たちと私に向って、ふっと片手を振り上げた。ゴバツという音がして、『何か』が放たれた。放たれた、とわかったのは、音と同時に男たちが砕け散ったから。まるでガラスのように。凍りついて、砕け散った。

男たちは粉々になって吹き飛んだのに、小屋の壁には一切傷がなくて、呆然とする頭の片隅でそんなことを不思議に思っていた。

ぼんやりしたまま女神様を眺めていると、真っ白の服を着た女の子を従えて、女神様が私の前まで歩いてきた。しまった、どうしよう。床に倒れたまま女神様をじろじろ見るなんて、なんて無礼なまねを。なんとか体制を立て直して平伏しようと思ったけど、殴られた痛みと縛られた両手のせいでまともに動けなかった。

突然、私の視界は揺れ動く。ふわりと温かい何かに包まれて、私は戸惑いを隠せなかった。

「大丈夫。もう大丈夫だから。もう、怖くないからね」

私は、女神様に抱きしめられていた。ああ、なんて優しい。

そこでようやく私は震えていることに気がついた。ガクガクと全身は震え、歯がカチカチと鳴っている。だから、女神様は私を抱きしめてくれたんだ。

私を包む温もり。耳を打つ優しい声。私の頭をゆっくり撫でる手。私の顔は半分女神様の紙に埋もれていて、息を吸うと甘くて優しい匂いがした。そんなどれもがあまりに幸せで、私に安心をもたらし続けて。せつかく女神様が抱きしめてくれるのに、ダメだと

わかっていても、私は自分の瞳から流れ出る涙を止めることができなかった。

「ふえっ……えぐっ……」

「辛かったね、よく頑張ったよ。あなたの妹も大丈夫。だから、安心していいんだよ」

「」

私は、大丈夫と囁き続けてくれる女神様に抱きしめられながら、泣き続けるしかできなかった。

いつしか、私の意識は闇へと落ちて行った。けれど、その闇は怖くなくて、とても温かかった。

美しいまるで女神のような少女は、幼い一人の少女を木陰に残し、小屋の方に向かいました。ただ、その少女に「あなたの姉は助けるから」と言い残して。

本当は、すごく寒いはずなのに若い少女は寒さを感じていませんでした。そのことを不思議に思いましたが、今はそれ以上に心配なことがあります。

「おねえちゃん……」

少女は無力でした。自らの大好きな姉が自分を庇ってあの小屋に残ったのだとわかっていても、少女にはどうすることも出来なかったのです。ただ、姉の信頼にこたえるため、ひたすら姉の言葉を信じ山を登り続けることしか出来なかったのです。

しかし、少女は幸運にも『魔法』^{まじき}に出会いました。魔法のように美しい白銀の髪。強く気高い覇気と包み込むような優しさを併せ持つ黄金の瞳。触れるのをためらうほど綺麗な白い肌。まさしく女神と呼ぶにふさわしい女性。そしてその女性が従えるのは、なぜか妖精という言葉を思い浮かべてしまう、これまた美しい真っ白の少女。白い髪に宝石のような翠の瞳をした、真っ白の服を着た幼い少女。あれはきつと女神様だ。そして、女神様が連れてるあの人もきつとすごい御方なんだ。と少女は思いました。

そんな女神様が助けてくれるということです。姉は大丈夫だろうか。襲ってきた悪い奴らに何か酷いことをされていないだろうか。と少女は心配でしたが、女神様を信じて待つことにしました。両の手を組み、祈りをささげながら。

扉を壊して女神様が小屋の中に入って、すぐに何かが砕けるような音が聞こえました。少女は組んだ両手にさらに力を込めて、膝をついて祈ります。願えばきつと届くのだと、姉が言っていたのです。サクリ、と雪を踏む足音が聞こえました。小屋から出てきたのは女神様。その腕の中には涙を流しながらも安心した様子で眠るフルールの姉、クレア。

少女も、堪えていた涙を溢れさせてしまいました。女神様はそんな少女にわずかに黄金の光を纏いながら微笑みかけてくれます。真っ白の少女を連れて、少女の姉を抱え、静かに少女の方に歩いてきます。

「おえねちゃん！」

少女は駆けだしました。もう、何も考えられませんが。少女の心は姉が無事だったという喜びと、女神様に対する感謝でいっぱいだったからです。

たった二人きりだった姉妹は救われました。そんな姉妹二人から女神と思われている少女、天影泉。彼女は姉妹との出会いを経て、

運命を歩み始めます。

私は、凍りついて砕け散った死体の始末をロゼに頼んで、それが終わると二人の少女を連れて再び小屋に入った。

姉妹だという少女二人のうち、姉の方のクレアちゃんは未だ眠ったまま。あれほどのことがあったんだ。今はゆっくり休んで欲しい。おそらく姉妹二人で使っているであろう小さなベッドにクレアちゃんの身体を寝かせて、優しく銀色の髪を撫でて、私は小屋の中を見渡した。

建てられてからかなりの時間が経っているとわかるけど、ずいぶん綺麗に住んでいる。掃除や整理整頓が行き届いている。

妹の方のフルールちゃんはというと、心配そうにベッドに腰掛け姉の顔を覗き込んでいる。

「大丈夫だよ。眠ってるだけ。けど、ちょっと体力が落ちてるみたいだから、しっかり食べて休んでいれば痣も治るし元気になるよ」

なぜクレアちゃんの体調の詳しいことがわかるのかというと、もちろんロゼに教えてもらったから。ロゼいわく、魔力の流れを見れば体調の良し悪し、病気や怪我の具合もわかるのだと言う。普通の魔術師などはそこまで魔力の流れを視ることが出来ないのだが、ロゼくらいの高位の存在になると簡単らしい。

と、簡単に健康になるように気をつけることを言ってみただけど、簡単じゃなさそう。だって、この生活を見れば嫌でもわかる。この姉妹はちゃんとした生活をしていない。おそらくこの世界でちゃんとした生活を出来ているのは貴族や王族といった類だけだろう。

私は、決めた。私は私が出会った全ての人たち、全ての存在と、元の世界に帰るまででも、関わり抜くと。

とりあえず、タオル、はないだろうから濡らした布か何かでクレアちゃんの身体を拭いてあげよう。嫌な連中に触られたという感触はなくならないが、汚れは落とせる。それに、ロゼが調べたところ、まだ『未遂』だったみたいで、素直に無事だったことを喜べる。

手頃な布を見つけたので水を溜めているらしい壺を見つけたので蓋を開けてみる。これが水瓶いのかどうか考えながら覗きこんでみると、見事に凍っていた。この寒い場所で氷が張ってしまうのはわかるけど、どうやら中まで完全に凍っている様子。たぶんこの小屋に突入した時周囲の温度をロゼが思いっきり下げていたから、そのせいだと思う。

しまった。どうしよう。ロゼに頼んだらなんとかならないかな？

「ロゼ、これ凍っちゃってるんだけど、なんとかならない？」

「はい。わたしは雪と氷を司る妖精。氷を水に変えるなど造作もありません」

おお、さすがロゼ。

ツウ……と壺の表面をロゼが撫でると一瞬で氷が水に変わってしまった。熱を加えて水に変えたのではなく、氷自身に熱を多量に吸収させて水に変えたらしい。

さすがに加熱することは出来なかったようで、部屋も冷えてたし暖炉に火を入れようと思う。

「火打石……」

暖炉のそばに置かれていたのは二つの石。これが名前しか聞いたことのない、火打石とかいうやつだろう。しかし私は火打石なんて使ったことないぞ。どうしよう。ここはこの家の主に声をかけてみることにする。すでに壺の水は勝手に触っちゃったが、一応聞いて

おこつ。勝手に使ってもいいのか。

「あの、フルールちゃん？お姉さんの身体を拭いてあげようと思うんだけど、お湯がいいと思うから火を起こしたいの。私は起こし方わからなくて……頼めるかな？」

「はは、はいっ！」

姉が落ち着いて眠っているのを見て安心して気を抜いていたのだろう。フルールちゃんはベッドに腰掛けていた状態から跳びあがって、緊張してるのかちょっとぎくしゃくとこちらにやってきた。

「じゃ、頼むね」

「はひっ！」

はひっ、って……。可愛い。

暖炉の方はフルールちゃんに頼んで、問題はまだ残っている。まだ、ここでのんびりしているわけにはいかない。

殺す前の連中の会話から仲間がまだいる様子。それに集中的に襲われたのは山の下にある村の方らしい。もしかしたらもう希望はないかもしれないけど、それでも私は行きたい。もうこの子たちに関わったのだ。今さら放っておけない。

村の方に、行こつ。

「フルールちゃん」

「ふへ？」

どうやら火はもつついたらしく木の板らしきものでパタパタと風

を送って一生懸命火を大きくしていた。

「私、ちょっと村の方に下りてくるからお姉ちゃんを見ててね」

「は、はい！」

まだ緊張は抜けきらない様子で、けどはっきりした返事を返してくれた。そのフルールちゃんを見て、もう大丈夫だろうと判断した。小屋の外に出るとすぐにロゼに声をかけた。

「ロゼ、小屋に結界を。彼女たちを守って」

「了解しました」

今、私の気が昂っているからなのか、それともこの世界の魔法に慣れてきたからなのか、私に才能があったのか、ロゼの行使する魔法をはつきりと感じ取ることが出来た。呪文も動作も必要とせず、一瞬で発動する『何か』^{まほう}。本当は、天才と呼ばれる才能、常人には理解の及ばない英知、一言でも間違えば死に繋がる呪文などが必要とする。ロゼは、本当に最高位の妖精として凄まじい力を持っている。それは、望めば一国を一瞬で焼き払えるほど。

展開された結界は私の目にはつきりと淡い光を放つ壁として見えている。どのくらいの力を持っているのか、どんな効果を持っているのか、それが今の私にははつきりとわかる。この結界なら、安心できる。

「村へ」

「はい」

短い私の声に、ロゼは同じく短い返事を返した。

巻き起こる吹雪。多量の雪と風が私とロゼを包み、空へと舞い上がる。空中に現れるのは氷の巨大な鳥。大きな翼を広げたそれに乗ると、一気に山を下り始めた。

確かに気持ちは昂ってるけど、落ち着いていた。私の思考に淀みはない。これこそ、私が壊れているという証明ではないだろうか。案外、この野蛮な世界の方が私に合っているのかもしれない。でもやっぱり、私はあの世界に帰りたい。まだまだやり残したことがあるんだ。

そんなことを考えて、少し安心して笑った。私はこれ以上壊れることはないんだと思って。

悲劇には奇跡を。私は、この理不尽で無慈悲な世界で、理想を成してみせる。

第五話「女神の記憶」(前書き)

遅くなりました！

ありふれた不幸かも知れないけど、許せない。不思議な少女、天影泉は氷の妖精であるロゼと共に立ち向かいます。徐々に戻り始める記憶。それは、いったい何を意味するのか。まだまだ泉の物語は始まったばかり。

ご意見感想、お待ちしております！

ではどうぞ！

第五話「女神の記憶」

空を暗くどんよりした雲が多い、村は紅く染まっていました。炎の赤、血の紅、肉のアカ。家のほとんどは燃えて、壁や道は血で染まり、ついさつきまで生きていた人たちは生々しいアカい肉を晒していました。

地獄がこの世にあるとしたら、まさしくこの光景を言うのでしよう。そう呼ぶことしか出来ない光景でした。

たくさんの足音。響く悲鳴。下品な笑い声。村のあちこちに死体があり、村人の大半は死に絶えましたが、わずかに残った人たちは襲ってきた山賊に抵抗していました。

幸い真つ先に逃がされ蔵の中に保護された女性や子供たちは、逃げ遅れた数人のお婆ちゃんを除き全員無事でした。しかし男性は数えるほどしか生き残っていませんでした。

男たちは作物を保存するための大きな蔵に立てこもり扉のところにたくさんの物を積んで持ちこたえていました。木製の蔵なので燃やされてしまう可能性もありましたが、中には少しの金目の物と女性たちがいましたので燃やされずにすんでいました。しかしそれも時間の問題です。山賊たちがいつ火を放つのかわかりません。

子供たちは怯えて身体を小さくして、女性たちは震えながらも子供たちを抱き締め、男たちはそれぞれ武器を構えながら、誰もがもうダメだと思いました。

地獄。理不尽な暴力。人間とは本能を抑え理性で行動できる生き物ですが、理性で行動するのを諦めた愚かな者たちがいなくなることはありません。本当の意味で『人間』と呼べる者は世界でほんの数人しかいないでしょう。愚か者たちが溢れるこの時代、そしてこの世界。この光景が、この地獄が、普通だったのです。勇者も、英雄も、賢者も、聖人も、世界を変えるまでには至らない。そんな名で湛えられている者たちでさえ、愚か者たちの一人だったのですか

ら。

では、世界を変えることなど出来ないのか。それは、違います。力など関係ありません。ただわずかにでも、平穩を、幸福を、理想を、思い動いたなら、変えられるのです。

女神は確かに、舞い降りるのですから。

ズドオン！

轟音が鳴り響き、扉は積み上げられた物と共に吹き飛びました。飛び散った扉の破片は少し焼け焦げていて、扉を破壊した何かの威力を物語っていました。

轟音は、決して彼らの福音ではなく、悪魔の足音でした。

「ずいぶんとまア、手こずらせてくれたなア……」

低い声と荒い足音を響かせて蔵の中に入ってきたのは一人の男。それなりに上質な物を身に纏っているのだが、乱雑な雰囲気です。全く良い印象を受けません。手には男の身長より大きい杖を握っていました。

「ま、魔術師……ッ！」

村人の男たちは声に反応し武器を構えましたが、杖が見えた瞬間武器を取り落してしまいました。永い年月を経たと思われる杖は、『魔術師』の証拠。

『魔術師』は世界にほんの一握りしかいない。たとえ小さなマッチほどの炎しか出せなくても、魔力があればそれだけで国に仕えることも貴族になることも夢ではない。ほんの少しでも魔力があるなら人生が変わる。それほどまでに『魔術師』とは凄い存在なのです。

『魔術師』にただの人間は絶対に勝てない。それは、この世界の常

識。

弱い魔力しかない『魔術師』でさえ希少な存在。扉と積んであった物を吹き飛ばすほどの威力を持つ魔術を扱える、強力な魔力を持つ『魔術師』になんて、抗えるはずがない。

杖を持った男の後ろから、ぞろぞろと山賊たちが蔵に入ってきた。どうやら、『魔術師』の男は山賊のリーダーだったようです。

「へへっ……諦めな。ただの人間が『魔術師』に勝てるわけねえのは知ってるよなあ？」

入ってきた山賊たちの一人が下品な笑いを浮かべながら言いました。

誰もが諦め絶望した時でした。杖を持った山賊のリーダーが魔術によって火球を生成し始めた瞬間、蔵の入口の方から何かが飛び散りました。

ゴバア！

散弾銃のように放たれた何かは正確に山賊たちを打ち抜きました。山賊たちは杖を持った山賊のリーダーの男を残し、全員まるでガラスのように砕け散りました。どうやら杖を持った男は運よく当たらずに済んだようでした。

男はなかなか強力な魔力を保有していたからこそ、魔術を扱えるからこそ、その攻撃がいかなるものなのか理解できました。一発一発に想像も出来ないほどに膨大な魔力が込められた小さな氷の礫でした。それが数十発、一斉に放たれたのです。それは、明らかに人間に行える現象の範疇を超えています。

男はそんな攻撃を成した存在に戦慄しました。

蔵に明るい黄金の光が入ってきます。黄金の光を纏い、黄金の瞳を輝かせ、白銀の髪をふわりとなびかせた、まさしく女神としか言

いようのないような美少女が入ってきました。黒く見たこともないような技術を用いて作られた上質な服に身を包み、真っ白の服を着た翠の瞳の幼女を連れて、ゆったりと歩いてその女神は入ってきました。

その場の誰もがあまりの神々しさに動けなくなっていました。もちろん、杖を持った男もまた、先ほど感じた恐怖すら忘れて、ただ、女神に見惚れてしまっていました。

その女神が連れていた幼女が片手を一閃。杖を持った男の意識はその瞬間失われました。散弾銃のように放たれた氷の礫とは比べ物にならない速度を以て放たれた強力な氷弾が、男を襲ったのです。

女神は一切の言葉を発することなく、ただ、その蔵の中に立てもっていた人たちを見て、満足気に微笑むとあっさり去って行ってしまいました。去って行く一瞬、女神様が悲しそうな顔をしたのを、蔵の中にいた一人の少女だけが気付きました。

結局、私が救えたのはほんの数十人だけだった。それでも十分だと言う人もいるかもしれない。けど、私にとっては、あまり変わらない。正直なことを言うと、誰も助からなくてもよかった。私が関わり抜くと決めて、守りたかった存在はあの姉妹だったから。けど、あの姉妹のためにも、この村は必要だ。

気持ちを切り替える。女性や子供たちはどうやらほぼ全員無事みたいだった。男性が少なくなっていたのはやっぱり抗戦したからだろう。山賊は全員始末したから脅威は去った。けど、これからはこの村を再建しないといけない。それは、やっぱり大変なことだろう。私は無力だ。こんなにも力がないとは思わなかった。決意も、覚悟もしたのに、まだまだ私の心は揺れる。それは、ダメだ。あの、甘くて優しい幸せな日常に帰りたい。だから、揺れてちゃダメなんだ。

「ご主人様、これで御顔を」

ロゼに声をかけられてようやく気付いた。自分の頬に手をやると濡れた感触。

私、泣いていたの……？

ロゼに渡されたのは、氷の器に入った水だった。すごい。こんなことも出来るんだ。

手早く水で顔を洗うと、水は凍りついて、淡く散った。タオルいらず、っていうわけだ。

やっぱり私は、悲しくて怖かったんだ。世界は所詮こんなものだって知って。せつかく、妖精という心強い味方がいるのに、少ししか守れなくて。

「ありがとう、ロゼ。ようやく、本当に覚悟出来たよ」

「はい。ご主人様のためならば、どんなことでもいたしましょう」

そう言ってくれたロゼは、最初の時みたいな氷の表情じゃなくて、ふわりと微笑んでいた。それが、壊れた私の心の隙間に、沁み込んでいった。

再び巨大な氷の鳥で山小屋に帰ると、二人の少女は身を寄せ合って眠っていた。

「ふふ……」

思わず笑みをこぼしながら、私は二人の眠るベッドに腰掛ける。

「さて、これからどうしようか」

「やはり当初の予定通り、旅に出るのがよろしいかと」

「うん。そうだね」

ふと見た窓から見えたのはどんより暗い空。これは雪降るかなあ、そう言えば雪って初めてだなあなんて思っていると、私はようやくその異変に気づいた。

あれ……？私って、こんな髪白かったっけ……？大きな精神的ショックを受けると髪が白くなるとか聞いたことがあるのもものすごく心配になった。

「ロ、ロゼっ！板状の氷出して！」

「了解しました」

慌てる私にロゼは冷静に対応する。

ロゼから手渡された氷を急いで覗き込む。

私は一瞬、呼吸が止まった。

「な……何、これ……」

もはや驚くことなんてないと思ってたけど、これにはさすがに驚いた。

鏡のようにピカピカな氷に映り込んだ私。けれど、いつもの私とはずいぶん違っていた。

服が制服なのは一緒。顔もちろん一緒。けど、髪はキラキラ輝く白銀色。瞳は神秘的に輝く黄金色。なな、なんて私、ガイジンさんっぽくなってるんでしょーか……？

しかし一瞬で開き直った。きつと異世界補正か何か関わってる

んだ。きつとそうだ。元の世界に帰ればきつと元の私に戻るんだ。そうに違いない。見たところ、この世界の、少なくとも私のいる地方は西洋系の人たちだから、銀髪に金の瞳は怪しまれないはず。いや、さすがに金の瞳はマズいか。顔を隠す手段を考えないと。

まあ、見た目が少々違うくらい何も問題はないかと考えて、気にしないことにした。

そんな容姿を自覚してから、頭の中に何かがよぎる。これは……『世界』……『改変』……一体何のこと？

でも今はどうにも出来ない。ロゼにも心配させちゃいけないし。

「どうか、したのですか……？」

ロゼは可愛く小首を傾げて心配そうにこちらを見ていた。

ロゼに微笑んで安心させると、私は床に腰を下ろし、ベッドに突っ伏した。少しだけ、私も眠ることにした。きつと、良い夢が見れると信じて。

この世界にあの御方が現れた瞬間、まさしく世界が変わった。それを知覚出来たのはわたしだけだろう。それは、幸福なことだ。

大昔、神や悪魔や精霊たちが戦いを繰り返していた頃。わたしは生まれた。その頃のわたしは小さな小さな妖精だった。空から舞い降りる雪の結晶に宿る小さな妖精。誰にも気づかれることなく、静かに生まれたわたしは溶けてはまた空に戻り、降ってはまた溶けてを繰り返し、そのまま数百年を過ごした。知性を持ち、力を持ち始めたのはずいぶん経ってから。それでもまだわたしは数多くいる氷の妖精の一つだった。数千年を生きた氷の精霊の眷属けんそくとして、わたしは存在していた。

さらに数千年。神々の戦いは終わりを告げ、世界に平穏が戻った

かと思われた。だが、今度は『人間』という生き物が大地を、海を、世界を侵略し始めた。いつしか『人間』たちは自分たちで殺し合い、さらなる戦いを繰り広げた。彼らにはわたしたちのような高位の存在を縛り付ける、あるいは消滅させるような技術も確かに持っているが、簡単にできることではない。よっぽど下位の精霊や妖精でない限り『人間』のような下等種族に使役されることもない。だから、わたしは眠りについた。

眠りにつく場所を選んだのは最北端に位置する巨大な雪山。山の半分も登れば生き物は皆死に絶える極寒の地獄。わたしが留まるのにちょうどいい場所だった。

そうして千年が過ぎようかという時。あの御方は現れた。

同じ氷や雪を司る存在でもよほど高位の存在でもない限り一瞬で消滅してしまうほどの冷気に満たされた空間を形成している山頂付近。そこに突然、何の予兆もなく現れた。

唐突に理解した。その現れた存在は究極だと。それは世界、いや、ありとあらゆるものの頂点に立つ存在だと。濃密な覇気。それでいて神ですら包み込んでしまいそうなほどの柔らかい気配。その存在は二つとない幻想と理想を持つ者。

出会えた。ようやく出会えた。死の存在しないわたしは何か揺さぶられるということはなかった。高位の存在となつた今では何者もわたしを害することは出来ないだろう。しかし、その時のわたしはかつてない激情に揺さぶられていた。

人間と違つて『魂』を直接見るわたしたちは、相手を理解するのにそこまで時間がかからない。相手も強力な力を持ち意図的に隠していたのなら別だが、それ以外ではその者の『魔力』と『魂』を視ることで理解できる。その『魂』がああ御方は別格だった。

ついて行きたい。一緒に居たい。お傍に仕えたい。そう思った。強い憧れのような、信頼のような、不思議なものを感じた。これだけは確かだと言える。わたしは、間違いなく自分である御方に支配されることを望んでいる。

そして、まるで『人間』のように緊張し慌てているわたしを、認めてくださった。奴隷の証、契約の証、あの御方の所有物であるという証である『名前』をいただいた。その名は……。

『ジュレ・ロゼ』
『氷結の雫』

その名はわたしの中に染み込んで、わたしという存在を縛りあげていく。

この契約は、通常の契約とは少し違う。自ら望んで、自らの『魂』を差し出す契約。通常の契約とは、相手を奴隷にするもの。今回の契約は、“圧倒的に格上の相手”としか出来ない契約。

あの御方との系がつながり、わたしの存在が『昇華』する。

わたしという存在、そして精霊や妖精には『死』が存在しない。

だから、厳密には“生きている”とは言えない。けれど、今ははっきりと実感出来る。今、わたしは確かに“生きている”。

ああ、ご主人様。『天影泉』様。

わたしの、『女神』様。

心の中に湧きあがる様々な感情を反芻しながら、わたしはご主人様に与えていただいた小さな体の小さな手をそっと握りしめた。

わたしのご主人様は今、二人の少女と共に眠っている。ああ、ご主人様は本当にお美しい。容姿はもちろん、『魂』、『精神』もが美しい。

わたしはご主人様のお傍にそっと静かに立ち、この小屋を囲う結界を強化した。

「ごゆるりと、お休みください。ご主人様の安らぎは、何者にも邪魔させません」

誰に言うでもなく小さく呟いて、わたしはじつとご主人様の御顔を
見つめた。

夢。

それは懐かしい気がする風景。一切の見覚えがないのに、なぜか
懐かしい。それは、私の失われた記憶の一つなのだろうか。

どこまでも続く黄金の大地。点々と浮かぶ純白の雲。夕焼けのよ
うに紅く染まつている空。

自分の『中身』を見ているような、自分の『中身』の中にいてる
ような、そんな感じがする。訳がわからないけど、ほんとにそんな
感じがするんだ。

遠い遠い記憶。それはきつと、私の魂に刻まれた記憶。

一人の男性と、一人の女性が少し離れた場所で向かい合っていた。
男性は、瞳を黄金に輝かせ、その背に漆黒の翼を背負っていた。そ
の翼はかすれて歪み、何か力の塊なのだろう。女性は髪を白銀に変
え、その背に純白の翼を背負っていた。その翼は天使の翼のような
静粛なものではなく、触れるものを切り裂くような鋭さがあった。

そして、二人は激突した。女性は身体を様々な魔獣・精霊・天使・
悪魔、果てには神々にまで変化させ、一本で大陸を焼き払えるので
はないかというほどの力が込められた聖剣・魔剣を数千本どこから
か取り出しては振り回し、男性を追い立てていく。しかし、その全
てをまるで『初めからなかった』かのように、男性が黄金の瞳でひ
と睨みすると消滅していく。

「父さん……母さん……」

なぜか、唐突に私の口からそんな言葉がこぼれた。

いつの間にか二人の姿は消えていて、今度は一人の青年が私の前

に立っていた。

「泉……」

「兄さん……」

私の名を呼ぶその青年の名を、今度は私が呼ぼうとすると、私の声にノイズが入った。

兄さん……？私には、兄がいたの……？

青年の姿や周囲に景色が急に遠のいていく。もうすぐ、私は目覚めるんだ。夢から覚める。

名前も思い出せない両親と兄。なぜか戦っていた両親。私を励ますような優しい目をしていた兄。私は一体、何を忘れているんだろう。どれほどのことを忘れているんだろう。何も、思い出せない。

第六話「少女の失われた日常」(前書き)

約二か月ぶり。遅くなりまして本当にすいませんっ。
せっかく読んでくださっている方もいるのに……。
頑張りますので、これから読んでくださると、嬉しいです。
それぞれ何かを抱える少女たち。胸に強い思いを秘めて、異世界へ
と旅立ちます。

それではどうぞ。

第六話「少女の失われた日常」

「何々？その目は。私は完璧人間じゃありませんよ」

それが、最後に聞いた泉姉の言葉だった。

後悔は、何度しても足りないくらい。

どうして、あの時一緒に着いて帰らなかったんだろう。どうして、何の心配もせずに一人で学校に行ってしまったんだろう。

その時の事を何度も思い出しながら、俺はふらふらと歩き続ける。太陽はもう完全に沈んで、暗くなり始めた世界。

全てが輝いて見えた世界が今はもうなんとも思わない。この世界には、あの人がいないから。

ただ、歩き続ける。消えてしまった、大切な義姉を探して。少しの情報も手に入らない。まるで、本当に蒸発でもしてしまったかというように。

「くそ……」

呟いてみても、何かが変わるわけじゃない。けど、許せない。自分が。世界が。

何故、泉姉が消えなくてはいけなかったのか。一体何があったのか。自分の意思でいなくなったのか。それとも何か事件に巻き込まれたのか。

考えて、自分の意思でいなくなったのは絶対じゃない、と思った。

泉姉は、たとえ何があったとしてもちゃんと冷静に対応出来る立派な人。だから、誰にも何も告げず消える、なんてことは絶対じゃない。

「どこに、いるんだよ……泉姉……」

泉姉が消えてしまって、もう一週間。

家にかかってくる泉姉の友人たちからの電話で、泉姉の人望を知って。その友人たちの必死さから、泉姉の凄さをもっと良く知って。そして、自分の中の、泉姉の大きさを知って。

何度も、助けられた。ずっと、助けられてきた。

だから、恩返しをしたいと思っていた。泉姉がピンチになったら、助けたいと思っていた。

だが、一体なんだこれは。気がついたらいなくなっていて。俺は、何にもすることが出来なくて。結局、俺は一人で街を歩き続けるしか出来なくて。

不安でへたり込んでしまいそうになる足をさらにもう一步と踏み出して。きつと泉姉は大丈夫と自分に言い聞かせる。

そうだ。泉姉はきつと大丈夫。あの人は決して弱い人じゃない。優しく。大きく。とても強い人。だから、大丈夫。きつと。きつとそうだ。

だから俺は探し続ける。泉姉が見つかるまで。ずっと、ずっと。

「早く帰って来いよ……泉姉」

僕は、信じて疑わなかった。

これまでの日常がこれからもやってくることを。『彼女』の存在が変えてしまった僕の新しい日常が明日もまたやってくるのだと。

けれど、違った。

僕の日常が『彼女』の存在の消失と共に音を立てて崩れさってしまっ

た。『彼女』、あまかげ・いずみ天影泉は、僕が告白して、振られた次の日。まるで全てが幻想だったとでも言うように、消え去ってしまったように、経験したことのない

僕の中の何かがなくなってしまったように、経験したことのない消失感に苛まれていた。

『彼女』には振られてしまった。でも、僕は忘れる事なんて出来なかった。それどころか、本当に、本気で、『彼女』の事が好きになつてしまった。

だから、可能性がなくても、もう少し頑張ってみようと思つていた。

次の日の学校には、『彼女』の姿はなかった。今日は休んでいるだけだろうと、『彼女』の無事を疑うことすらなかった。その次の日も、さらに次の日も、学校に来ることはなかった。その頃から、『天影泉が行方不明になった』という噂が流れ始めた。いろんな人に話を聞いてみるが、どうやら本当の事のようにだった。

それから僕は、『彼女』の姿を探し続けた。

『彼女』がいなくなつてから、今日で一週間。まるで本当に最初からいなかったかのように、一切何の情報も手に入らない。

それでも僕は、探し続けるしかなかった。

途中、御坂早戸みさかはやとという『彼女』の義理の弟を見つけた。彼もまた、ずっと姉を探し続けているようだった。

彼が諦められないように、僕も諦めることは出来ない。

『彼女』がいない学校はそれだけで味気なく感じる。それは、間違ひなく僕が変わりつつあるということ。

何人もの女性が話しかけてくるが、僕はその全てを少し素っ気なくあしらつた。嫌われたかもしれない。でも、構わない。僕にとつて大切なのは『彼女』だけなのだ。

だけど、どうしても無視出来ない人物が話しかけてきた。

「ずいぶんと、熱心に泉を探しているようじゃないか。聞いてはいないが、泉がいなくなった日の前日、泉が放課後遅くまで学校に残る事になつた原因はお前にあるんだろう？」

放課後、家に帰ろうと廊下を歩いていると、僕の目の前に雫月櫻なつき・さくらが立ちはだかつた。立ちはだかつた少女もまた、『彼女』を慕う者

の一人だった。

「そう、だね……」

なんて、答えたらいいのか、わからない。

「まあ、貴様の泉に対する用事なんて容易に想像はつくが……。そして、貴様ごときが泉に対しそんな行動を取ることすら許せんが……。率直に答える。私の質問は二つだ」

凄まじい威圧感。これが殺気っていうのかなあ、なんてほんやり思った。

「一つ、泉に何か異常を感じられなかったか？二つ、何故、泉を探す？」

雫月櫻は、僕が『彼女』に告白し、それが失敗すると確信して、二つ目の質問をしている。

そう言われても仕方がないとはわかっている。それでも、悔しかった。僕という人間は、今まで何をやってきたのかと。

「僕に、答えられることはないよ」

僕に、何かを言う権利はない。それは、わかりきったこと。

「ふん、期待はしていなかったがな」

雫月櫻は冷たく僕を睨みつけて、足早に立ち去って行った。

僕は、立ち去って行く背中に深く頭を下げた。遠くなっている背中中はなんだか寂しそうで、僕はそうせざるを得なかった。

『彼女』や、その友人たちに認められなくても、それでも、僕は『彼女』のために頑張ろう。
そう、改めて決意した。

私は、カツ、とわざと大きく足音を鳴らした。

私が妙にイライラして、伊坂卓也いさか・たくやに八つ当たりをしたのは、間違
いなく私の責任だ。確かに、私は泉の友人として伊坂卓也にキツイ
言葉を叩きつけるのは当然だと思う。だが、今回はほぼ私の八つ当
たりだ。

一度家に帰り、舞弓の家に集まる。集まるのはもちろん、私、天あ
知舞弓まち・まゆ、姫耶麻苺那ひめやま・めいかの三人。
みんな、一週間ずっと泉を探し続けている。

「結局、情報はナシ、か……」

私が小さく呟いて、三人ともうつむいた。

何も、わからない。どこを探しても、どんなに情報収集しても、
ほんの少しでも、泉の影が見えてくることはない。泉の消息が、掴
めることはない。

「あたしが、いつもベタベタしてたから、泉ちゃんいなくなっちゃ
ったのかな……」

「それはない。絶対に、ないよ。優しくて、とっても強い泉ちゃん
だよ？そんなわけない」

苺那の言葉にはいつもの元気はなく、後ろ向きで。それを窺めた
舞弓の言葉にはいつもの包み込むような優しさはなく、寂しげで。

私たちは、ただひたすらに『天影泉』という一人の少女の存在の大きさを、噛み締めていた。

泉が駆け落ちとかの可能性は少ない。この場合、可能性として高いのは何かの事件に巻き込まれた。もしくは何者かに連れ去られた。もし、何者かに連れ去られたのなら、すでに手遅れの可能性が高い。もう一週間も経っている。いいように弄ばれて、売られるなりされていることだろう。

ああ、虫唾が走る。犯人がわかったなら、必ずこの手でソイツの四肢を引き千切り、胴から首を切り離し、魂までの粉々にしてやる。だが、泉をよく知る私たちは、その可能性も低いと考えていた。

泉は決して間抜けではない。機転が利き、常に冷静で、知識も豊富必ず大成するだろうと確信できる優秀な人物だ。そんな泉が、何者かに拉致される、というのは考えにくい。

しかし、何かの事件に巻き込まれるという可能性は、ないとは言いつて置けない。優しい泉の事だ。誰かが危険にさらされていたら、放つて置くわけがない。

本当に事件に巻き込まれていたなら、何故私たちを頼ってくれなかったのか。頼れないような状況だったのか。何故何か手掛かりを残してくれなかったのか。それすらも出来ない状況だったのか。

「どんなに困難な状況だろうとも、私たちは必ず泉を発見し、救い出さねばならない」

「うん。ずっと、助けてもらってばかりだったからね」

「泉ちゃんの、力にならないとね」

私の言葉に、舞弓と尊那が続く。二人とも、少し無理している感じが抜けきらないが、それでも微笑んでくれた。

私たちは、泉に救われた。私たちの存在の根底から、魂から救済

された。

私たちは、何かしら壊れている。そのことに、ずっと苦しみ続けていた。普通とは違う。普通の幸福は手に入れられない。普通の不幸すら手に入れられない。そんな私たちを、泉は強い輝きを放つ理想を携えて、救い出したのだ。

そんな、救われた私たちだから。今ここに集い、必ず泉を救い出すと誓う。たとえ相手がいかなる存在だろうとしても。

「待ってる、泉。必ず、救い出す」

同じように寂しくて、悲しい二人に少し元気を貰って、あたしは今日も自分を保っている。たぶん、舞弓ちゃんも櫻ちゃんも同じだと思う。

保っている。けど、やっぱり我慢しきれない。泉ちゃんがどこかで大変なことに巻き込まれているかもしれないと思うと、我慢できない。

ああ、“お腹すいた”。

何度か、泉ちゃんの手助けをするために『頑張る』ことはあったけど、この衝動は久しい。

どうしようもなく湧き上がる“飢餓感”。唾液が溢れて、抑えようと何度も唾を飲み込む。

何とか、この衝動を抑えることが出来ている。自分をちゃんと保つことが出来ている。全てを、泉ちゃんを困らせている原因にぶつけるために。

ずっと我慢していると、振り切ったはずの考えが心の隅から起きあがってくる。

(泉ちゃんは、いつも頼ってばかりの、離れることが出来なくて依存しているあたしが嫌で、逃げちゃったんじゃないの?)

泉ちゃんがいなくなったとわかった次の日から、ずっと思い続けていること。

『愛しの泉ちゃん』と割と本気の冗談を言いながら、泉ちゃんにすり寄って、ちよつと冷たくあしらわれて、けどやっぱり泉ちゃんは優しく、気がつくくと頭を撫でてくれている。楽しくて、幸せで。どんなに価値のあるものにも代えることの出来ない、最高の宝物。あたしには手に入れることの出来ないと思っていた、最高の日常。それは、泉ちゃんの『行方不明』という形で崩壊した。

きつと、櫻ちゃんもあたしと同じことを考えてると思う。

さつき言つてた櫻ちゃんの「必ず救い出す」という言葉。あれはきつと、泉ちゃんは自分でいなくなることは絶対に無く、誰かが泉ちゃんに何かしたんだと確信していた言葉だと思った。

泉ちゃんはあたしのが嫌になったんじゃないかと心配してたけど、もうそれはやめることにする。舞弓ちゃんにも言われたし。

だからあたしは、全力で、あたしの全てを懸けて、泉ちゃんのために頑張る。

そう、決意を新たにしながら家への道を歩いていると、唐突に何か“違和感”を感じた。

夕暮れ。いつも通りの街の風景。泉ちゃんがいないことと、そのせいであたしを“飢餓感”が襲っている以外は、いつも通り。ご飯はちゃんと食べてるしおやつも食べたにも関わらず、あたしはひどい“飢餓感”に襲われながら、あたしは妙な違和感を感じていた。

ピリツとした違和感。勘違いかもしれないと思つてたけど、なかなかその違和感は消えてくれない。それどころか、違和感はどんどんはつきりと感じられるようになってきた。

いつも、あたしは何かわからないことが起こったり、困ったりし

た時、泉ちゃんの手を思い出す。『常に冷静に。どんなに強固な城塞だろうと、小さな針で突き崩せないことはない。小さな最善の行動を積み重ね、望む理想を成すのだ』。これはあたしの解釈が混ざってる。本当はもっとぼかして優しい言葉で泉ちゃんはあたしに教えてくれた。

ここでの正しい行動は、違和感が自分にとって危険なものなのかという判断をすること。そして、判断をより正確にするために情報を集めること。直感的には、どうしてか『危ない』気がする。

歩く速度や方向を変えてみる。違和感に変化はなかった。まるで、あたしを追いかけるように違和感は強くなるばかり。

他に考えられることは……。外的要因がないとすれば、自分に何か原因があるかもしれない。と、すれば。病気……。かな？

考えを巡らせながら、足を家の方に向ける。

突然、ピリツとした頭痛。そして、現実とは思えない声が聞こえる。

(き……さ……よ……)

足を止める。

違和感は明確な気配となって近づいてきて、頭痛はどんどん強くなる。そして、声は徐々にはっきりと。

(きた……きよ……も……)

同時に、激しくなる“飢餓感”。

頭のどこかで、我慢なんてしないで喰らってしまえと囁いてる気がした。

(来たれ。最強の魔物よ)

魔物？一体……。

「どういう、こと……？」

小さなあたしの眩きは夕陽に照らされた紅い世界に溶けて消えていく。

(我が怨敵を破滅させる魔物よ)

意識が……朦朧と……。

(来たれ！)

再び強く呼ぶ声。抗えない引つ張られるような感覚。

次の瞬間、あたしは暗闇へと落ちていった。

お腹、空いたなあ……。

「え？」

唐突に嫌な感じがした。何かが消えていくような、そんな感じ。それを感じ取ったのは、私が『普通の人間ではない』からだろう。泉ちゃんがいなくなった時とは、あの時とは違う。もう、何も失いたくないから。感じたものに従い、私は『能力』を全力展開する。感じたものは、歪んでいく世界。薄く、淡くなっていく苺那ちゃん。櫻ちゃんの存在。

(どうして！？なんでッ！？)

止められない。歪みはすでに大きくなってしまっている。私には、
どうにも出来ない。

嫌な感覚は飢えた猛獣のように今度は私に襲ってきた。

(せ……ま……ど……い)

頭痛と共に何か声が聞こえる。

そうか。『これ』が泉ちゃんを連れていってしまったんだ。私は
理解した。

燃え上がるように膨れていく怒り。同時に、強くなっていく私の
『能力』。

(せい……さま……どうか……さい)

もう、抵抗はしない。私も行くんだ。泉ちゃんが連れ去られてし
まった場所に。

「待ってて、泉ちゃん。私、頑張るから」

引っ張られる感覚。強くなっていく頭痛と近づく謎の気配。

(精霊様、どうか我らの国を御救い下さい)

頑張ってみせる。天知舞弓という存在を証明するために。大切な、
泉ちゃんを、莓那ちゃんを、櫻ちゃんを、助けるために。

(どうか！)

さあ連れていけ、というように両手を広げて目を閉じた。

そうして、私の意識は途切れた。

全ては大切な人たちのために。

第七話「異界の日常」(前書き)

ものすごく遅くなりました！ようやく第七話完成です！

雪山に住む姉妹と一緒に生活して一週間、泉は旅立つ決意をします。

ではではどうぞ……

第七話「異界の日常」

「んんう……」

いつもとは違う妙な浮遊感を感じながら、泉は目を覚ましました。ゆっくりと身体を起こしてすぐ脇に手をつきました。しかし、その時の感触が。

もふん。

「……あれ？」

ぼやけた視界と寝ぼけた頭。まだまだ泉の再起動は終わっていません。なので全く状況が理解できませんでした。とりあえず危険はないようです。泉は懸命に状況の判断に努めます。

もふ、もふもふ、ふもん。

……なんだかとつても良い感触です。トロン、と泉の目尻は下がってきてしまいます。

ようやくぼやけた視界は鮮明に、寝ぼけた頭ははっきりとしてきました。下を向いた泉の視界に入ってきたのは、真っ白な綿。もこもこの真っ白い大きな綿のベッドの上に、泉は寝ていたのです。最高です。もはや言う事はありません。究極です。

「お目覚めですか、ご主人様」

「ん」

僅かに声を漏らして振り向くと、そこには翠の瞳に純白の髪を持つ美しい雪の少女がいました。『ここ』に来てから、泉を支えてくれた頼もしい雪と氷の妖精さん。

そこで泉は理解しました。自分の下にあつた綿の塊は良く見ると雪が集まって出来ています。もちろん、冷たくはありません。むしろ温かい。最高位に位置する氷の妖精なら造作もないことでしょう。

「ありがとう。良く眠れたよ」

「そうですね。喜んでいただけただけで何よりです」

微笑んで礼を言う泉に、ロゼは少しだけはいかにかで答えます。少しずつに、ですが、ロゼの笑顔が増えてきました。とても良いことです。

「良い夢が、見れた気がする」

「そうですね」

ほんわりと言う泉に、ロゼが小さく返します。契約をした時から変わらない感覚。それは、とても心地良いものです。

完全に目を覚ました泉は床に降り立ちます。

雪で出来たふわふわのベッドが消え去ったのを確認して、ゆつくりと辺りを見渡しました。泉のいる場所はもちろん泉が助けたあの姉妹の小屋です。小さく質素な小屋。大きくもない粗末なベッドと棚が一つ。小さなテーブルが一つに壊れそうな椅子が二つ。それ以外は細々した物がいくつもある程度でした。

小屋の奥では小さな暖炉に火が揺らめいています。その脇には割

と大きな水瓶。水瓶の淵には小さく畳んだ布がかかっています。さらに視線を動かすと、床に額をこすりつけ平伏する二人の少女が。

「えっ？ど、どうしたの、二人とも」

泉には全く状況が理解出来ません。

何故二人の少女は泉に向かって平伏しているのか。恩人である泉に恩返しをするにしても少しやりすぎです。

「ほら、顔上げて？とりあえず座って話しよ？ほら、そこに座って座って」

泉は頭を床につけばなしの姉妹をベッドに腰掛けるよう促します。慣れた寝台の方が落ち着くだろうという泉の配慮でした。

泉はテーブルの脇の椅子に腰かけ、ロゼはその隣に立っています。背筋を伸ばして静かに立つその姿は主を護る騎士。しかし、白いワンピースに身を包んだ『氷結の雫^{ジュレ・ロゼ}』は非常に可愛いです。本人は騎士のような立ち姿を気に入ったのか、隣に座ったら？という泉の言葉を断りました。

「それで、一体どうしたの？」

緊張しているのか、相変わらずぎくしゃくした動きだけど、怯えたりはしていない様子の姉妹。

泉の問いかけに、姉のクレアが答えます。

「あの、その……『人』よりも遥かに高貴な御方だと……なので、『女神様』に粗相をしてはいけないと思ひまして……」

おずおずと小さく話し出したクレアの言葉を簡単に説明すると、
泉がおそらく『人間』なんて霞むほど素晴らしい存在で、まさしく
『女神様』で、平伏していた、と。

「……………」

「ああ、あの…………何か粗相を」

啞然として固まる泉にあわあわしだすクレア。その隣では同じく
ベッドに腰かけていた妹のフルールも同じようにあわあわしていま
す。

（いつの間に私は『女神』なんて大層なものに…………）

確かに泉は二人を助けましたが、高貴な身分になる原因がわかり
ません。

（変わったところと言えば…………容姿？）

容姿は大きく変わってしまったています。元の黒い髪と瞳は見る影
もなく、現在は美しい白銀の髪と黄金の瞳です。

しかしそれだけでは『女神』なんて大きく勘違いされるわけがあ
りません。と、本人は思っているようです。

（うーん…………助けたって言うても私は何もやってないしなあ…………ほ
ぼロゼがやったんだし）

助けた、という実感を泉は持てないでいました。移動から攻撃ま
で全てをロゼに任せていたのですから、持てなくて当然でしょう。
もちろん、ロゼが動く要因は全て泉なのですから、泉が助けたと言

つても間違いいはないのですが。泉の命令がなければ、ロゼは助けようとはしなかったでしょうし。

「安心して。私は女神じゃないし、高貴な身分っていうわけでもないの」

優しく微笑みかけて。

その微笑みはまさに女神様のようで、泉のその笑顔でクリアとフールは呆けていたりします。

とまあ、そんなことがあります。何とか泉の存在とロゼの事を理解してもらって。泉はもう少しだけこの村に、姉妹のところにとどまることにしました。

盗賊たちに襲われた傷も癒えないまま去ることは、出来なかったのです。

ロゼとの契約から様々な知識を引きだしながら、ゆったりとした生活が始まりました。

「でもホントに凄いいよね。こんな何もなさそうな雪山の中で生活するなんて。暖炉の火もずっと維持できるわけじゃないし、どうしてるの?」

「気温は、丁度この場所、冷気が溜まりにくい場所になっているよ。うで夜でもそれなりの温度が保てるようです」

「ほー、なるほど」

ロゼのおかげで寒さに対する対策をしなくてもいい泉は、しばらく雪山で過ごしていても普通の場所と変わらない感覚なのです。

そんな会話を、のんびりと椅子に腰かけてしていました。

一通りのやることも終わり、暇が出来た午後。助けてくれたお礼

だと村の人達に頂いた紅茶を楽しんでいます。

もちろん、紅茶なんて貴族たちが嗜む贅沢品です。たまたま手に入ったのだという貴重な品を少しだけ、泉は貰いました。泉が知る紅茶の味には程遠い粗末なものでしたが、ロゼとクレアとフルールと、四人で飲む紅茶はとても美味でした。

泉が『この世界』に来て、今日で一週間が経ちました。

少しずつですが、クレアとフルール、そして山の麓の村の人達も、元の生活を取り戻しつつありました。

「いずみおねえちゃん！」

「ん、なあに？」

「えへへー。だいすきー！」

お砂糖は高価なのでありませんが、ミルクは頂いたものがありました。ミルクの入った紅茶を飲み干したフルールが、泉に抱きつきます。

最近はずっと泉にべったりのフルールちゃん。最初の頃は神々しい容姿の泉におどおどしていましたが、徐々に慣れて、今では暇さえあれば抱きつきます。

お姉ちゃんのクレアちゃんが少し寂しそうです。しかし、クレアちゃんも夜やフルールの知らないところで泉に甘えていたりします。いくら妹がいると言っても、寂しかったのでしょう。今まで甘えられる相手もいなかったでしょうし。

「いいにおいがするー」

「そう？ありがと」

ぐりぐりと泉の胸に顔を擦りつけるフルールにくすぐったさを感じながらも、フルールの頭を撫でて微笑む泉。

もちろん、こんな場所でお風呂なんてありません。せいぜい濡れた布で身体を拭く程度です。

服も洗濯したいし、お風呂にも入りたい。しかしそれは無理な話なので、そんな時こそ『魔法』の定番です。

一般的には『魔術』と『魔法』には差がないようですが、本当は明確な違いがあるようです。ロゼによると、『魔術』とは『魔を扱う術』であり、『魔法』とは『魔を支配する法』である、とのこと。もっと詳しい違いがあるのですが、簡単に言くと、『魔術』と『魔法』は全く別物であり、基本的に優れているのは『魔法』である、ということですよ。

まあ今では『魔法』を扱えるのは精霊や幻獣などの高位に属する神秘の存在たちだけのようで、一般的に超常的な現象を起こす手段を総合的に『魔術』と呼ぶようです。

さて、ロゼが使える『魔法』で身体や服を清める事が出来ないのかと考えた泉。

しかし、いくら最高位の妖精といっても、ロゼは氷を司る者。精密に汚れのみを凍結し粉碎することは一応可能なのだそうですが、万が一泉に危害を加えてしまう可能性があるので出来ないそうです。それならばと泉は自分に『魔術』や『魔法』の適正がないのか、と考えました。

ロゼに調べてもらった結果、泉の身体は『魔術』や『魔法』を使用する際の触媒として最高級の適正を示すことが判明しました。

『魔術』や『魔法』を扱うには膨大な時間が必要です。泉の身体が触媒としての効果を示すならば、ロゼが泉を触媒に『魔法』を発動させれば、ロゼの能力を超えた現象を起こす事が出来るのではないのでしょうか。

そうして、ロゼは完全な安全が保障された『浄化』の『魔法』、服や身体の汚れを凍結・粉碎する『魔法』を使用する事が出来るよ

うになりました。

目に見えて変化のある『魔法』ではないのですが、効果は確かにあります。

本当は、お風呂に浸かりたいのですが……日本人として。ロゼの『魔法』で問題はないので、今は良しとしていつか温泉を作ってやる！と意気込む泉なのでした。

ちなみに、フルールちゃんの良い匂いがする発言は単に泉そのものの匂いで、『浄化』は全く関係ありません。なんかこう、甘くて優しい匂いがするそうです。私も嗅いでみた……ん、こほん。失礼しました。

眠そうになつてきたフルールちゃんをベッドに運んで、優しく頭を撫でて背中を軽く叩いて寝かしつけると、今度はクレアちゃんが泉に抱きついてきました。

「その、泉、お姉様……」

「やっぱり、お姉様ってちょっとくすぐりたいな」

「お嫌ですか？」

「ううん。クレアちゃんがそう呼びたいなら、私は嬉しいな」

「え、えへへ……」

「ふふ……」

フルールちゃんが眠るベッドに腰掛けて、泉は優しくクレアちゃんの頭を撫でます。

最初の頃は頭を撫でられる事に慣れていない様子で、戸惑っていたクレアちゃんでしたが、今では嬉しそうに気持ち良さそうに目を

細めています。

そんな幸せな時間を、そろそろ終わりにしようと思泉は考えていました。

この『世界』に来て一週間。ずっとこの村に、この姉妹の家に居続ける事は出来ません。泉は元の『世界』にたくさんのお切な人達を残し、泉が受けたたくさんのお恩を返せていないのですから。

今日の夜、元の『世界』へ帰る方法を探す旅に出ようと決めました。

泉の身体はどうやら“普通”ではないようです。『触媒』として『最高級』を示すその特性は“普通”とは言えないでしょう。

泉はずっと自分は普通ではない、壊れていると自覚していましたが、まさか自らの精神だけではなく肉体まで普通ではないとは思いませんでした。確かに、記憶はなく、『天影泉』という名だけを覚えていて、その名の記録は一切残っていないので、何があってもおかしくはないのですが。

右手でクレアちゃんの頭を撫でながら、左手の掌を見つめる泉。

(この身体には、どれだけの謎、秘密が眠ってるんだろう)

必ず、重大な何かが、泉の身体と失われた記憶に隠されていると、泉は確信していました。

(まあ、ここで深く考えても、全然情報が足りない。動かないと、始まらない……)

ふと泉は窓から空を見上げます。ゆっくりと紅く染まっていく空。もうすぐ、太陽が沈みます。

もうしばらくフルールちゃんを寝かせてあげて、クレアちゃんを甘えさせてあげて、夕食を食べて、それから旅立つ話をしようと思泉は決意しました。

泉ちゃんの旅がもうすぐ始まります。泉ちゃんと新たな三人の異世界からの来訪者を巻き込んで、世界は少しずつ変わり始めています。

『世界の改変せし者』、『快樂殺人鬼』、『暴食者』、『破壊神』。彼女たちはいかなる想いで、いかなる選択をして、いかなる形で『世界』と関わっていくのでしょうか。

(皆、元気にしてるかなあ……)

クレアちゃんを抱きしめながら、泉は大切な三人の友人たちを思い浮かべていました。

「つまらん。何かないのか？ 奇怪な怪物が出たとか、竜ドラゴンが出たとか、何かあっても良い気がするのだが。実につまらん。我を退屈させるとは何たる狼藉。塵芥どもめが」

濃厚な覇気がこもった声で、一人の男が言いました。

男の名はモーリス「S」バルダンテ。セルビア王国で最も武芸に秀でた家系の若き当主です。

ミドルネームのSはstab（刺し貫く）の頭文字。セルビア王国に仕える騎士だったバルダンテ家が数々の偉業を成し遂げ貴族の仲間入りを果たした時、国王から直々に授かった名。バルダンテ家には代々stabの名と共に『突撃槍ランス』の技術が受け継がれてきました。

男、モーリスは歴代のバルダンテ家当主の中でも一番の強さを誇っています。『突撃槍ランス』の扱いもさることながら、モーリスには魔術師としての適性もありました。

完全に、ではありませんが、魔術師としての適性、魔力は血によ

って受け継がれる性質を持っていました。騎士から貴族に成り上がったバルダンテ家は徐々に魔術の力も取り込みました。

そしてモーリスは『突撃槍^{ランス}』を扱う才能も、魔術師の才能も、最高のものを持っていました。

騎士も魔術師も関係なく、等しく刺し貫いてきたバルダンテの騎士。そんなバルダンテの騎士が魔術の力まで手に入れてしまったら、無敵と言っても過言ではないでしょう。

無敵の名を欲しいままにしているモーリス。彼が傲慢になっつまうのは必然だったのでしょう。

「何も報告がないのか？なら奴隷でも買いに行こうか。娼婦は好かん。誰にでも尻尾を振るような雌犬はいかな」

小さな欠伸をしながら出て行こうとするモーリスに、同じ部屋で報告書に目を通していたモーリス直属の部下が声をかけます。

「モーリス様、一つ、面白い報告がございました」

「なんだ？言ってみろ」

鋭い槍のような眼光が部下を刺し貫きます。

部下は一瞬ひるんだ様子でしたが、ゆっくりと再び口を開きました。

「北の雪山、トルンの麓付近に『女神』がいる、という噂があるようです」

「……ほう。『女神』、とな」

笑みの形に歪む口元。

邪悪な笑みを浮かべたモーリスは、一瞬でどこからか四メートルを超える巨大な『突撃槍^{ランス}』を取り出すと、部下に突き付けました。

「準備しろ。『女神』とやらを取りにいけど。我に相応しい者なら、妻にしてやらんでもない」

巨大な槍は唐突に消え去りました。

部下はその様子を、汗を流しながら見ていました。

その部下も魔術師としての適性を持っていて、強力な魔術を扱える者でした。しかし、何度見てもわかりません。モーリスが何をしたのか、全くわからないのです。

モーリスの力に畏怖を抱きながら、すばやく準備を始めました。急がなければ、今度は本当に槍で刺し貫かれてしまうのですから。

「クク……『女神』と呼ばれる存在がいるのだ。何かしらの理由があるのだらうな。実に楽しみだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0527j/>

Senri 黄昏を連れた少女

2010年10月29日05時15分発行